

紫障子

泉鏡花作

—

戸外には黒い雨が簾のやうに降つて、颯と繁吹いて雨戸に當ると、ばら／＼と斷れて礫のやう亂れながら、隙間洩る閨の灯で■と白く成つて入交りつゝ、ばら／＼と枕頭の障子を敲くと、其が浸込むやうに、ばら／＼と鳴つて、面を打つて目、口、鼻を飛塞ぐ、其の鬱陶しさと一言つたらぬ。

が、拂つても落ちず、撫でれば、搔けば、粘々と附着いて、其のまゝ痘痕に成りさうで、生暖く、臭い、腥い。

其のおなじ事を、繰返すうちに、吐あげるやうな、咳込むやうな胸苦しさに堪へないで、アツと思ふと、京都の宿で目が覺めた。否、目が覺めたと言ふより、正氣づいて我に返つたのであらう。半ば夢心地に魘されて居たのであるから。．．．．

木菟は・・・私の友人を恚う名づける、木來はA氏とかB氏とかすべきであるが、たかゞ平民の上方見物、旅費さへあれば何もアルファベットまで借りて使ふ要はない。しかし此の話の男が内々との事ゆゑ、「鶯が、鶯が、たま／＼都へ」の童謡に因んで假に鶯と名づけて、次手に題も鶯が可からうと思つたけれども、形、恰好、何う見ても鶯と云ふ柄でない。然し晝間は≡として居て、夜に成ると、珍しい事を見よう聞かうで、耳を引立て、目を圓らかにしたと言ふさへあるのに、呐々としてももの語るに口を尖らかす工合が、いや、可笑いほど何かに似て居る・・・然うだ、肖如だから木菟とする。

扱て木菟は、石を括りつけたかと思ふ重い枕から、漸と頭を擡げて、先刻からの寝苦しさに自然と夢の中で悶搔いたと見えて、肩が抜けて、ぐつたりと寛かつた、胴着の袖ぐるみに、苦しい胸を反して起上らうとして、ぐつと手を支くと、羽二重より柔かな、ふつくり滑かな手觸りに、毛爪に掛けて、雛鳥か何ぞ引搦んだか、とハツとして、肩を捻つて身を開いた。

並べた厚衾に、美人か一人、梅、松の光琳模様、
朱鷺色地に處々、色紙を淺黄で鹿の子に絞った、紋
羽二重の掛蒲團、おなじ白羽二重の裏つけたのを二
枚、ふはりと掛けて、こんもりと透つた鼻の半ばま
で、輕さうに襟を被いで、枕を近く、然りながら、
柳が霞む黒髪で、すや／＼と眠つて居る。

木菟の今度の旅行に取つては、唯一の同伴なり、
案内者の、大阪南地の蘆繪と言ふ藝妓である。

眉毛をほんのり横顔で、眞白な百合の花を咲かせ
たやうに、柔く、甘く、暖かさうに蒲團に投げた手
の上へ、起きるはずみの肱をついた。木菟は吃驚し
たらしく胸を横へ引いて起直つた。

唯見ると、風が誘つたやうに女の腕の其の白百合
が、微に揺れると、白羽二重の袖裏が纏れて、緋の
板へ縮緬の肌着がちら／＼と夢を囁く、夢も囁ぞ燃
立つばかり紅であらう。と思ふ、藤紫の半襟も、微
に汗ばむらしい。萌黄の地に、百合を白く、淡いと
濃いと、葉を藍緑の友染の長襦袢の肩を、一輪白く
覗かせたのが、胸も露白、と見えつゝ、其のまゝ靜

に蝶の翼の寢息を續ける。

待て、面影さへ寄添うて、随分手枕に貸しさうな
其の腕を、怒つたら詫るまで、うっかり觸つたのを
驚いたのではない。

木菟は美しい寢鳥の夢を破つて、目を覺さすまい
と思つたのである。

「嚙ぞ疲れたらうな。．．．．頼まれて引受けたが義理とは言つても、義理ばかりぢやあ憐うは出ない。あだには思はれませんが。あゝ、つい昨日のやうだけれど、今夜で三晩か、．．．．大阪で一晩、昨夜は奈良で一晩、．．．．夕方の汽車で宇治、桃山を通つて京都へ来た。――」

宿つたのは八坂の塔を、森に仰ぐ、並樹のやうな松原の片側町を、奥深く、一軒家に似た、襖も畳も、姿見の中に色を其のまゝ透通る、綺麗で、閑な、芝玉と言ふ家であつた。

「餘り旅行をした経験がないとか言つて、此家も萬事が行届いた家だと言ふ事を、おなじ宗右衛門町の友だちから聞いて居て、連込んでくれたのだが、日が暮れて、七條の停車場へ着いた時、何處からも言込んで置かないのだから、然うでもない。．．．．先方が立籠んで斷られでもするやうな事があると、旅宿は他へ取つて、代へるにしても、一日でも

道中、泊をまごつかせるやうでは申譯がない、と言つて、そんな事にも心遣ひ。――一つの大きな氣扱ひより、此の何でもない、細い、小さな、セコンドを刻むやうな心配をする方が、どんなに氣を使つて、心を疲らせるか知れませんか。――あゝ、然うだ、大阪から掛けて、奈良と、恚う一つ座敷に寝て居て、此方が一寸でも動くと、煙草にも、灰吹にも、直ぐに目を覺まして、「火はありますか。」「お湯を上げませうか。」と、寝ながら、南天の實を散して、枕に雪の手がつもる。……」

と寝苦しい夢に苛まれて、ぐつたりと成つた顔を、染色も模様も對な掛蒲團に押着けると、熱い我が鼻息が、密と靡いて、露白な其の白百合の香を吸ふやうに膚に響く。

木菟は手で我が呼吸を遮つて、

「あゝ推参な、口説いたら、枕に貸しさうだなぞとは沙汰過ぎた。此は、いぎたなく寝忘れたのではない。寝ながら張詰めた氣の油斷なく、此方の身動きに連れて、咳をすれば、「かぜひくな」で、すぐに掛蒲團の襟を壓へる心構へをするのであらう。

・ ・ ・
「 蘆繪姐さん、目を覺すんぢやありませんよ。 ・ ・
」

彼は逆に手を伸して、枕頭の煙草を取ったが、ト
吸付けようとすると、其さへ何故か煙が胸に悶へさ
うで、獨り巻莨で額を壓へた。

「眞個だ、 ・ ・ ・ 宵に七條の停車場へ着いて、
自動車を雇ふ時も然うだつけ。ー 奈良を立つ時
は曇りだつたが、京都は雨だつたと見えて、びちや
／＼と燈に黒い艶を見せて濡れて居た。 ・ ・ ・
何うやら直ぐに東山の影が倒に映りさうな、あの廣
場を、急に陽氣も冷く成るし、 ・ ・ ・ 早く落着
く先へ落着かせようと思ふ、此の人の深切から、一
寸 ・ ・ ・ 眉毛の上へ、篝火で白魚の影が映った
やうな、舞仕込の小手招ぎくらゐでは、づらりと並
んだ大な目の光る自動車が寄つて來ぬ。

何とか云つたつけ。 ・ ・ ・ 渡船を呼ぶやうだ
とか言つて莞爾して、まだるツこいと、あの濡れた
地を、草履で構はずひた／＼と、世帯崩して、大輪

の銀杏返の鬢を揺つて駈出すから。――

此方は、汽車が籠んで袖を押し合せて居た思ぢやあ、
太郎坊の袖にぶら下つたと云ふ見物ではない。天人
の翼から落ちたやうに、停車場前の人脚の中にぼか
んとして、信玄袋一つ無しに杖をついた處は、雁が
留まつて、沖の尻に、ふはりと浪に乗つたやうな様
子だつて。・・・・・・

木菟は思續ける。

「出番の都合か、先約でもあつたか、蘆繪が最初掛合つた自動車が、オイソレと抄を遣らぬ。並んだ次のに掛ると、其が煮切らず、三臺めが又埒が明かぬ。「行くのかい、行かないのかねえ。」

「然うどす。」とか言ふのが聞えて、茶色の鳥打を耳まで被つて、もつそりと大外套を被つたのが二人まで唯のそ／＼と歩行くのが見えて、蘆繪が「困るわね、焦つたい。」と、並んだ七八臺の自動車の間を、縫つたり、抜けたり、足袋をチラ／＼と襦を捌いて、出つ入りつ間を廻る。模様の花は、濡れても露で好いとして、雨にしとりを見せてむくりと頭を並べた發動機が、巨大な牛の面に見える處へ、ふつと地を摺つて青白い光を放つ電燈は、這奴が鼻嵐を噴く形で美しい、姿は、其の間に挟つて、上品な紗綾形の濃い紫紺のコートを被た姿ぐるみ、一束に挫折つて、鞍に著けられさうで、痛々しかつた。

呪詛はれたやうだ、牛の時詣に――怪我をしよう。

で、飲續けの酒に疲れた聲を絞つて、「私は構ひ
ませんよ。歩行いても、お前さんと連立つて、京の
町を通れば光榮です。」「あ、そりや私の方こそ
そ．．．．．ですけれど最う出来ました。」と其の
時極つたらしい自動車の窓に立つたのが、自分で扉
をよつと開けて、「さ、お乗りやす。」と、何うか
すると其のまゝの阪地言葉に成る。．．．．

それもサ願はくば、構はず、うまれたまゝの舌の
小唄を、自由自在に聞して貰ひたいのだと、此のお
のぼりは言ふのだけれど、聞取り悪いと思ふ所爲か、
それとも調子が合はせいゝと思ふのか、窮屈さうに
（ですよ。）（ねえ。）で言葉を合はせる、時々舌
ツ足らずに成つて、仇氣ないが、可笑いと、言ふも
のゝ、且つ以つて自分への心遣ひ、これしかしなが
ら心中する時、一先粗せんぞの宗旨をかへるの意
氣だ、粗略には思はれません。」

と頷くやうに、か傍の寝顔を見る下から、つい目
を瞑つて吻と呼吸する。．．．．胸尖へ込上げる、
何やらものゝ悶がある。．．．．つい、だらしな
く、ニタ／＼としさうな處を、木菟は嘴を横に歪め

て、苦い顔して、それに、身に染みて優しい事を言
つたつけ。……然う／＼、自動車がまつしく
らに、宵暗の、巻繪の京の燈の中を飛んだ時だ。――
いや、また此の女が窓を開けた。と成ると、容色
と言ひ場所柄で、牛車の簾を捲いた風情であつた。
ト並んで對に成つた處は、吉野紙に包まれて白粉の
薄霞に籠つたやうなものだつけ。忽ち烏帽子でも被
つた氣で、木曾將軍此にあり、となけなしの鬚を反
らしたまででは可かつたが、つむじ曲りの牛飼めが、
目にももの見せむづ意氣込やら、疾風の如く大路を飛
ばせる、宵の口の人通りさつ／＼と一團りづゝの黒
い影が粉に成つて散る度に、腰は据つても、肝はヒ
ヤイさに宙に躍つて、ふためく、轉げる。

堪らぬと、窓を敲いて、「やあ、運轉手、急ぐ旅
ではないよ、遅くても構はない、人達に怪我のない
やうに、可いかい、裡に居る二人なんざ、些と壊れ
ても構はない。」と正直な處を云ふと、「眞個に
な。」と此の女が莞爾して、一寸膝に手を置いたが、
片手で前途を熟と拝んで、「もし、清水の觀音様、
これからお傍へ参ります。誰方にもお怪我のないや

うに。
「

やがて、ぼつと霞の花の咲いた中を、眞青に水が
流れる、岸の柳が燈ながら、夜の黒地の羽二重に友
染の影を流した、大橋の上を、静まつてスツと抜け
ると、成程、見當は（お傍らしい、《が、颯と掠め
る、窗の音が松風の聲と成る・・・狐に魅まれ
たのだと、此の邊で、肩を合せた此の別嬪が、フツ
と消えて向うの辻へ、石の地藏が立ちさうな、松原
並木の片側町。

二ツ三ツ四ツ、忍べ、と謎を掛けたやうな、廂暗
く門深き、みがき格子の磨硝子の軒燈がちらちらと
彼方此方、松葉を歌の色紙の影。
「　　」
彼は蒲團の色紙を見た。

四

「自動車^{タクシ}がする／＼と行^ゆ過ぎて、ガツ／＼と齒^はを
 噛^かんで、一つぐい、と小戾^{こもと}りをして留^とまると、髪^{かみ}を
 低^{ひく}めて扉^{ひら}を出^でるのが、雲^{くも}を離^{はな}れて降^おりるやうで、
 「あ、此處^{こゝ}だんな。」と、春^{はる}の朧^{おぼろ}の玉芝^{たましば}を、眉^{まゆ}ほん
 のりと仰^{あふ}いだが、「一寸^{ちよひと}、待^まつておくれやす。」と
 續^{つづ}いて巢^すの裡^{なか}から耳^{みみ}を出^だす木菟^{みづと}の顔^{かほ}を留^とめながら、
 宵^{よひ}から三寸^{さんさう}下^{くだ}つたやうな格子^{かうしと}戸^とをガラリと開^あける後^{うしろ}
 姿^{すがた}が、座敷^{ざしき}がなくて斷^{ことわ}られうか。で、覺束^{おぼつか}なさの瀬^せ
 踏^みだけれども、手綺麗^{てぎれい}に門^{もん}に嵌^{はま}つて、さすがは藝者^{それしや}
 の、一寸^{ちよひと}横町^{よこまち}へ湯歸^{ゆがへ}りめいて、色^{いろ}つぱいのが頼母^{たのも}し
 かつた、．．．トばかりあると、一度^{ひと}消^きえた聲^{あし}
 音^{おと}がばた／＼と響^{ひび}いて引返^{ひきかへ}して來^きて、「さあ、何^どう
 ぞ。」とひつたり窗^{まど}に倚^よせる顔^{かほ}に、埃^{ほこ}だらけなのを
 觸^さらせまいと外套^{くわいたう}の袖^{そで}を圍^{かこ}つてポイと斷^たて、．．．
 ．．．「お世話^{せわ}様^{さま}」で、恚^かう松^{まつ}の中^{うち}に、ぼツと濡色^{ぬれいろ}で
 映^{うつ}る、何^{なん}とか(だんご)と書^かいた掛茶屋^{かけちや}めいたもの
 を、明^あ日は茶^{ちや}を飲^のまう、とゆつくりした心^{こゝろ}に成^なつた、
 可^な懐^{なつか}しく傍見^{わきみ}をしながら、――「白動車^{じどうしや}屋^やはん、
 一寸^{ちよひと}待^まつて、」と言棄^{いひす}てた此^この女^{をんな}と、．．．待^ま

てよ、格子を入つた敷石が露地かと思ふほど深かつたので、大阪の泊で、炬燵で聞いたのを思ひ出す。――

お前の袖と私が袖、・・・・

トンと地唄の合方で、カタ／＼と入ると亘つた、いや胸を反してい亘つた。「あれ危いと。」留南木が衣紋の突支棒、滑かな石に水を打つて清めてあるので、田舎もの／＼と、低聲で呟いて、發機で摺合つた片頬を背けて見返つた時に、入口に装つた、まだ新しい装鹽が、装鹽と知りながら、松はあり、渚の波、とふと旅の心の催すトタンに、ぽつりと白く、三石、碁石が並んだやうに見えたんだ。

「―― はてな・・・・」

――と思ふと、アツと込上げる、胸を厭へて、衾に突伏しさうにすると、火も点けないで持つた巻蓑が、ポロリと落ちた、が、切なさの餘り我知らず手先を藻掻いたと覺しく、巻きめがほぐれて、ほろ／＼と解けて、落ちて、白と薄紅梅の掛蒲團の小枝

に掛つたのが、一寸結玉章の風情があると、精々も
の綺麗に氣を持替へて、胸を透かさうとしても、炬
燵越にホツと立つ、媚かしい香水の薫さへ、吐くな
ら吐け、と藥が利くやうで、アツと又嘔上げ
る。 . . .

心を轉じて、氣を外へ移さうと、種々に宵からの
事を辿るうちに、八々と碁石に折衝ると、ゲツと、
其が、胸先へ支へたのである。

「 . . . 簾のやうに黒く降つた、雨
が砕けて白く飛んで、障子を敲いてばら／＼と、枕
を打つて、亂れ掛つたのも、交つた碁石。 . . .

「 . . . と、うゝ、と口一杯の唾を、漸と嚥下して、吻と
息した。

「馬鹿な、何を食つた紛れにだつて、碁石が腹へ
入りさうな譯はない。 . . . が、しかし變だ。

あれから廊下へ通つて、 . . .
と木菟は獨で、密と胸尖を撫でさげ、撫でさげ、

「通ると、其處へ、はじめて人柄な圓鬘に結つた女中が突當りへ迎ひに出て、「おいでやす・・・何うぞ此へ。」と更まるから、自然と此方も、「はい、はい。」と慇懃に通つて、見事な手水鉢だ、あゝ、好い梅の樹だ、思ひつきな石燈籠だと、庭を前にした奥座敷、次の室で、もそりと外套を脱ぎながら座敷を見ると、最う整然と、爐を二個、緞子で切つたやうに褥設けをして一つ挟んで、中を措いて、桐火桶が對に出て居る、行届いたものだった。

唯、先づ脊筋を、揺つて、衣紋を通して、床の間を背負つて、天井を憚らづ立つ處へ、波に片帆の三ツ紋、薄色の羽織に成つて、春ながら京の雨の冷さに、些と蒼味を帯びた色の白い中肉なのが、一寸おくれ毛を拂ひながら、着崩れた片裯長くはら／＼と百合のほのめくのが、亂れた白脛に紛つて入る蘆繪の風情は・・・」

「恚う、其の、新婚旅行にしては両方が砕け過ぎる。．．．．芝居から歸つた女房のやうでもあり病上りを見舞はれた妾と言ふ状もあり、いや、荷物が無くつて立つた處は、泊りに着いた落人の體もある。．．．．

と思へば、霞に棧を描いたやうな、障子に寄せて、黒檀の唐机を据ゑて、蒔繪の硯箱を飾つた。いづれも品ものゝ、づつしりと落着いたのを視れば、一夜かり寝の心地はせず、御殿の奥で反魂香を焚いた中へ、高尾が化けて出たとも見える。

少し竄れて、金紗縮緬に飛模様の絞りの蝶が菱々と成つて、胸高な帯さがりに淺黄の扱帯の、青い水のやうに浮世を覗いた状は、膚の白さを湧出づる清水のやうで悚然とさせた。．．．．

寒いと言へば、京は音にも聞く底冷のする處へ、餘りに片付いて掃除か届いて、襖も障子も透通りさうなのは、夜氣が染みて冷たかつた。悪く言ふので

はない、柱さへ天井さへ玉で刻んだやうなのだ。

恚うなりや野郎の玉の輿だ。

ふはりと緞子へ、度胸を据ゑたが、半分浮いたやうな腰を沈めると、此の女が、坐つた蒲團を少し、這つて、「お疲れだすやる。」と斜に手を支いたから、此方も會釋をして、「御苦勞様。」は一寸妙な形だつたが、――「もの閑で行届いた好い家ですね。しかし、寒い。」と肩を縮めて、此の女の媚かしい其の膝の上へ蔽被さるやうに、火鉢に嚙着いた處へ、女中が来て茶を入れる、出来合の殿様、袖を拂つて居直つたと。・・・・「大阪からお出ででしたか。」「違ひますさ、奈良から。」「えらい、いゝ處だんな、お楽しみで。そやけど寒うおましたやろ。二月堂さんのお水取がホン濟みましたばかりやよつて。」「・・・・」

成程、奈良でも旅籠屋で、然う言つたし、大阪へ着いたばかりで梅田の停車場から乗つた車夫も言つたが、一年中の寒い時ださうで、どつちも厳しかつた。が、今夜の京は一人で・・・・胸震をする

ばかり。と見て此女が胸で壓すやうに氣を入れて、
「御酒を早うな。」「はい／＼、お肴は。」 其處
で、すき焼で鴨を誂へた。

此の鴨は旨かつた。．．．待てよ、空腹で熱
爛で、じわ／＼と來た處を、舌を焼くばかり、ホツ
と云つて、ー あれが、何も胸へ支へたとは思は
れない。．．．他に海鼠、と一鹽の若狭
鯨．．．焜爐の火が赫々とするから、火鉢は一
つ向うへお隙で、此の女も、氣疲れやら、何やら立
つけた四五杯の遣取りに微酔と成つて、一つの火鉢
へ凭掛つて、襟脚も白々と覗かれる肩を合すばかり
にして、あの若狭鯨を、綺麗事に、何と雛へでも備
へさうに、細い指で鱈を放してサツと雀つてくれた
つけ。．．．
鯨が中毒する理由は無い。
の、此の蘆繪の手は、碁石を持った其のまゝであつ
たらうか。」

彼はけだるさうに、肩を窺めて首を掉つた。

「．．．．．黒石だ。．．．．．が、一體此處の

内で、碁石を視たのは、あの鰈を雀つてくれた前だつたらうか後だつたらうか、ト然うだ、前だ。

四五杯立続け杯を、焜爐火鉢の端に置いて。――女中は立違つて居なかつた。――煙草を取らうと、手搜りで、火鉢の附根で、手が此の女の袂に觸つた時、コトツと指に當つたものがある。些と大袈裟だが、然うでない。……ヒヤリと指が切れさうに冷くツて、氷の缺片のやうに應へたから、一度落したのを、又拾つて撮んだのが、あの碁石だつた。

仔細あつて、――蘆繪が一石、黒の碁石を持つて居るのを知つて居たから、「袂から出たんだね。」
「あ、眞個に。」と、此の女が、掌で一吋見て、指で迂らしたと思ふと、袂ぢや、つい、又溢す、机の上でも大業だし、だつたやら、くの字に成つて、うしろ向きに手を伸して、障子の棧へ、「五ツめ」と忘れぬお禁厭だらう、一人で言つて載せた時か、……」

六

「蘆繪が、別に開けもしないで、障子越に、偶と
 氣付いたさうで、「あゝ、亭のやうな、いゝ離亭が
 ありまん。」とか言つて、熟と覗いて居たつけ。
 其處どころぢやなかつた。此方はいまので煙草を
 取つて、火を點けて、唇へ持つて來ると鼻を突いて
 プンと嗅い。糠のやうな、油のやうな、腥いやうな、
 何とも堪へられぬ臭氣がした。酒も煙草も座にある
 ものゝ、あんな惡臭を放つのではない。……指
 だ。

いま碁石を拾つた指だが、其にしては、變だ、希
 有だ、と思つたばかり、何の穿鑿をする隙もな
 い。……一度其の臭氣を嗅いだばかりで、
 あゝ、可厭だと思ふと、今食べたばかりの、鴨には
 羽が生え、鰈には鰭が湧いて、胸間と思ふ處で、ピ
 チノ、バタノ、と跳ね廻る。アツと壓へて肘を支
 いて横に成つたが、掌に觸る耳が冷いほど、何故か
 一時に悚然とした。――

いや、まだ其の上に、其の以前から胸に支へて居たものがある。

京へ入つたのは夜だつけ。――四時何分かの汽車で奈良を立たうとして、猿澤の池のほとりの勝手屋とか言ふ旅籠を出て、障子の破れのぺら／＼と風に動くのが、白い舌を出すやうな、古ぼけた白晝の廓を抜けて、町通りを導者づれに交つて、古道具屋の店の人形の西行にも、葉茶屋の銘の喜撰にも、紅屋の看板の小町にも、活きた生のものに逢ふやうな気がしながら、蘆繪と二人づれで、ぶら／＼と歩いて。……

――風は冷く、砂はさら／＼と捲いた、が、それも黄色な幕を絞つて、古い都の面影を通りが、りに覗かせた。奈良の町の風情を思ひ浮べると、こみ返す胸も、やゝ静まつた。が、まだ煙草を飲む元氣も無しに頹然として、それでも背けて居た顔を、蘆繪の寝姿に向け直した。

「あゝ、此處に寝て居る人は、其處を百合の棲の水際立つて、外套と並んで歩いた。可懐い……」

・ 其の時は、氣ぶりにも、こんな、むか／＼する
可厭な心地がしようとは思はなかつた。

其の後だ。．．．然も自分の發議で、町端れ
の一膳めし屋へ入つて、輕石のやうな玉子焼を食つ
て、其が胸へ支へたのは。．．．あゝ．．．
・ 彼處で、此の女が碁石の黒を一石拾つた。．．
・ ．．

餘り暢氣で、停車場へ着くと、あゝ／＼彼がと言
ふ汽車が、むく／＼と煙を噴いて大な首を掉つて、
埒外を出て行く處。．．待つ間の怠屈に引返して
町へ入ると、「寒いわ、お一口。」と勧めたんだ。

いまが今まで、猿澤の池のほとりで、炬燵に屏風で
飲みながら、其の三味線で、．．．梅川の風俗
ひとめに立つを包み兼ね．．．何とかして忠兵衛
が、と言ふのを蕩けさうに成つて聞いた處。．．

「何屋と名がつくと億劫です。昨日、「(と然うだ、
昨日の晝過ぎ大佛殿をはじめ、東大寺、興福寺の巡
禮をした時だ。」．．．二月堂の傍の繪馬堂へ
入つて、焼豆腐と雁もどき、並びに蒟蒻、狸の煮込
みの皿盛で、釜から引こ抜いた熱爛を遣りましたね、

あれは甘かつた。酒も良かつた。あゝ言つた店がありますなら。「眞個においしうござんしたな。」と何が、此の女に旨からう。

言なり次第に、跋を合せて、彼處等の餅屋だ、飯屋だ、と覗いて歩行いて、「御兩名様、もしもし。」なんか、旅籠屋の軒に立つた、古風に矢立を腰にさした紺の前垂掛の宿引に呼懸けられるのを振り切りながら「可さうですぜ。」「は。」「と入つたのが、煮込のおでん、赤飯を盆づけで、店の暖簾は氣に入つた。が、眞暗な土間を抜けて、おつとこんなものがある、椅子や卓子に躓きながら、ほんの腰掛と薄暗い中座敷めいた處へ通ると、疊がじと／＼して汚い縁側に、おかはが見える。・・・

奇特に卓子臺を置いたが、手を掛けると、むら／＼と埃が立つ。いや弱つたつけな、鼻の下の赤爛れに成つた七つばかりの小女が、指をアングリと銜へて、ベソを搔いたやうに、框でじろ／＼と此方を視ると、五歳くらゐな次男坊が、頭から、向足までどく／＼な一つ身で、糠味噌桶から引出したどぶ漬の

茄子^{なす}が化^はけたやうに土間^{どま}で跳^はねる。
・
・
・
・
「

「見たばかりで、最う胸が一杯に成つた。が、誂を聞きに來た女房の、前掛が煮染めたやうで、禿げた紺の鯉口の垢光りに光る奴の、黒く生えた手の爪を竊と視ながら、とに角、酒を、と言つて、後で此の女も氣の毒な。何だか悄氣た體で、框まで立つて出て元氣の無い懷手、半襟を銜へて引きながら、土間の暗い隅を覗いて居たつけが。

此方を見向くと、寂しい笑顔で莞爾して、一寸頭を掉つて、さし足と言ふ見得で歸つて來て看を見たが、鰯も此目魚も皆どろ／＼、煮込も形なし、汚くつて、申譯に玉子焼を誂へた。と言つて、あの小女が幅つたく引曲げて、よち／＼と運んで來た膳の上の銚子を取つて、大形の缺けた猪口へ、濕氣拂、と酌をしようとして、袖の揺れた時、カチリと卓子臺の上へ轉がつたのが、……碁石だつた。――轉げた時は天井から鼠のふん、とギョツとしたよ。……

あゝ、と拾つて、「私の袂からだんな。」「然うらしいね。」と、中庭の薄明に透かして見ると、此の碁石に彩色がしてある、と此の女は言つたが、然うでない。黒い質緻へ、縦横に細い緋を見るやうに、青いのだの、薄蒼いのだの、黄色だの、白が交つて、微細に晃々と光つたのは、黄金の性を験すのに、然うやつて、碁石の黒に磨込んで試る事だ、と聞く。．．．其に違ひない。が、此の女の袂から這つた．．．あの、其の出處だ。

―― 出處に就いて、あの時も話合つた。が、此は其まで居た旗籠屋のに相違ないので、．．．

―― と言ふ次第は、――

肝心な處だ。．．．翠帳紅閨、玉芝の一室で、蘆繪と衾を並べながら、獨で、胸を嘔氣がつて、のツつ、反ツつして居る男の思出を辿るのなんぞに委して置けない、―― やがて、其の金彩藍粉の一枚の黒石か、燦爛たる惡龍毒蛇の鱗か、とも疑ふべき、不思議な事が起つたのであるから、こゝは作者が引取つて話すとしてしよう。

其の前日、所々見物をして、春日様の鹿は、今日
は、とお辭儀をして煎餅を食べるし、おのぼり木菟
はおいでやす、で、繪馬堂の煮込を噛る、と知つた
あとで、晩の泊を、菊水か、ホテルか、と案内者の
蘆繪は言つたけれど、スリツパで廊下をいこるのは、
此の土地に相應はない。膳にお平と中壺のついて出
る昔の本陣とでも言つたやうな旅籠を、木菟の証文
で。組合の旗を立てた車夫に訊くと、それぢやあ唄
にもある通り、「奈良の旅籠屋になさいませ。」で、
轅を相國寺へ巡らした後、芝生に鹿の搔伏す頃、猿
澤の他の汀を一廻り、蘆吹く風は無かつたが、入相
の鐘に波が立つ。廣野の中へ打撒けたやうな、あか
らさまなあの池は、深くも暗くもないけれど、唯人
の行く方へ、箕のごとく傾いてサラ／＼と動くと
言つた。が櫻らしい、木菟の目がチラついたに相違な
い。

櫻の中の錦川も、春淺ければ、木の葉と小石。細
い柳の石橋を渡つた角へ、ガラ／＼と車を二臺曳込
んだ。

「此が、名代の奈良の旅籠屋やて。」

「三輪の茶屋と一所に、唄にありますやろ。」

と掛合で車夫が遣る。

「成程。」

と鍵形の通庭に、昔の遺物を其のまゝな、八軒の下に立つて、木菟はきよろんとして、

「大い佛ぢやによつて大佛と、・・・先刻、

四國にの觀光團に、坊さんが棒を持つて教へるのを見て覚えて來ました。奈良の旅籠屋だから、奈良の旅籠屋。」

「へへへへへ。」

「ほへへへ。」

出迎へた番頭、女中の笑ふ中から、蘆繪の手が、友染の萌黄に白く穂に出で、

「早く、お上りや。」

と袖をぐいと曳いて、トン／＼と二階へ上る、壇の途中で、肩を捻つて、笑ひながら木菟の手を取つた。

欄干越・・・、二階へ上り切らない前から、
 最う見えた。上の、横手大廣間に、煙草盆を配つて
 ずらりと三十ばかり席を取つて、まだ一人も人影は
 見えないが、座蒲團が並べてある。

「まあ。」

「何、賑かで可いぢやありませんか。」

定めし、多人数の團體客が泊込む待設けであらう
 と思ひながら、おとなしい小娘に導かれて廊下下に
 掛ると、其の取着で件の大廣間とは壁で背中合せに
 成らうと思ふ十五疊敷くらゐな座敷に、おなじく十
 五六人分の座蒲團が並んで、此處には、其の座取の
 數と同じやうに、膳が並んで、然も皿、碗、鉢のも
 のまで丁寧に揃つて居ながら、・・・同じく
 誰も居ない、とばかりで通り抜けしなに思はず差覗
 く、トタンに顔を背けた、が、艶々と圓鬘に結つた、
 姿の細りした大屋の御新姐か、それとも豪商などの
 妾か、と思ふ人柄。何處か媚かしいのが、床柱を背
 後にして、火鉢に悄乎と寂しさうに端然と坐つた。
 其の背けたので薄明い中に横顔を見ただばかりで、案

内ないされた。――間あひだに一室ひとま置いた、――座敷ざしきへ導みちびかれて入はいつた、が、一寸ちよつと妙めうに思おもつた。
待まちうけの、其その大連たいれんの座ざの空むなしいのは然さる事ことだけ
れど、膳ぜんが並ならんで、婦をんなが唯一たゞひとり人は受取うけとれない。

其その唯一たゞひとり人も寂さびしさうに見みえた、と思おもふと、氣きを引ひかれて、さつと陽氣やうきを障子しやうじ越こし、すぐ前まへなる猿澤ざるざはの池いけの水みづに吸込すひこまれたやうに、一齊いつときに目めも暗くらく、座敷ざし敷きも冷つめたく、血ちの氣けを引攪ひつざらはれたかと、悚然ぞつとしたが、それも束つかの間ま、ふつくりと、旅たびの袖そでの袖そで近く、蘆繪あしゑの姿すがたが蝶てふの模様もやうで浮織うきおりに成なる處ところへ、大おほきな臺十だいじふ能のうで、小娘こむすめが、火ひを赫かつと運はこんで來たので、桃ももは白しろと紅あかと一しよ所に開ひらいて、敷流しきなした中古ちゆうぶの絨氈じゆうたんも、紫雲英げんげを咲さかせ、春はるに成なる。
で、火ひを入いれた眞鍮しんちゆうの獅噛しがみ火鉢ひばちを、座勝手ざがってに引ひか
うとすると、いや、重おもき事ことの如ごとし。で、ビクとも動うごかぬ。・・・逢魔あふまヶ時ときで、狸たぬきが附くっ着つけたので
は決けつしてない、旅籠屋はたごやが老舗しにせの身上しんしやう、輕かろんずべから
ざる重めかた量りやうである。

其處そこで、隣室りんしつ（叩たいて居あたが）の襖ふすまへ些ちと寄過よりすぎ

た、が、蒲團を其處へ敷いて二人座に着くと、襖際の何とか書いた横額の下に、碁笥を整然と飾つて碁盤があつた。

八テ、此を飾つて置きさうな床の間は、と視れば、山水の大幅はやがて黄昏に紛れつゝ、置ものは青銅の狂獅子、銅の平盤にそなれを活けた他に、床柱の掛活花に、紅白の牡丹の大輪の造花は面白い。

「炬燵がよござんせうな、あの、姐ちゃん、お炬燵を、何うぞ。．．．．．」

と次手に酒肴を急がせた蘆繪が、見物疲れに、うっかりしてた木菟の顔構、目の冴えないのを怠屈ゆゑ、とそんな事まで氣を揉んだが、

「如何。」と言ふに、チリ／＼と蟲の音のやうな石の音。

「本碁、．．．．．」

「星目置きますから、何うぞ。」と、最う並べ
るのを、慌てて留めて、

「串戯ぢやない。．．．．私に碁が打てれば、
お前さんを口説きます。」

「まあ、あんな事ばツかり。」と、掌で軽く其の

暮笥の蓋を扱く。

「五目、なら。」

「何うしやはる？」

「枕を、ー」

「あの、枕を。」

「驚いちゃ不可ません、賭けるんぢやあない、取
かへるんです。お前さんが負けたら括枕、私が負
たら船底枕、つまり負けた方が、枕を取替へて寝
んです。」

「おほ、おいでやす、さあ。」

「面白し、・・・」

木菟は沁みりとした聲で、

「蘆繪さん。」

「はい。」

「お前さんが聞けば、昔奥州の夷の話柄かと思はうが、下總國成東と言ふ處に温泉がある。東京から道程は近し、それに手軽だもんだから、五人づれ友だち同志、暑中休暇に遊びに行つた事がありま

す。．．．．面白づくに飲むわ食ふわで、勘定が足りなく成つて、皆が心當りへ無心して呼金の來るのを待つ間、其の始末だから、帳場へ對して、大廣間には陣取つても、心持は行燈部屋です。．．．．一人前の鯉のさし身で五人で剥がして、此の中へ後生だから、一合、もうたつた一合と、徳利に仕切をして見せて女中を強請る境遇さ、酒が來ると皆の咽喉が鱈のやうにキユウと鳴る、いや、お話に成らないんだ。

晝寢の眠氣ざましに、五目をしませうよ、と馴染の女中が來たから、私が對手に成るとね、姐御々々

と私たちが言った其の年増がね、―― 銚子の酒屋に許嫁の有るのを嫌つて、こんなしだらに成つてるが、あゝ、彼處へ縁着いて居れば可かつた、あんな方に首つたけ酒が飲ませられる。―― 首つたけは可訝いが、指で徳利を劃るからです、其奴をしんみりと言はれた時は、思はず美しい涙が出た。

恚うして、まあ、何年ぶりかで碁盤に向つて思出すんです、此の間から、ふんだんの灘の酒で、奈良の旅籠屋の碁の封手が、南の藝妓ぢやあ職過ぎますよ。」

「飛んだ事。」

と消すのを壓へて、

「眞個さ、それも此も、皆友だちの情です。」

「あの、征矢さんは。」と蘆繪が言ふ。

征矢は友だちの姓なのである。

「……湯治場で徳利を劃んなはつた、其の時のお一人だつたか。」

「何うして、征矢は大家の若旦那だよ。しかし仲よしでね、一昨年から會社の都合で大阪に勤めて居る。今度の旅行は上方見物とは言ふものゝ、……」

・ 唯あの人に逢ひに來たのが、定なんだ、
・ 處が生憎、其の會社の急用で土佐まで行かなけりや成らなかつたもんだから、四五日して歸るまでを、下宿の二階に放込んで置きもしないで、お前さんの袖に預けられた。・ 天下は太平、鳳凰の羽に包まれてると思ひます。」

「ま、こんな袖を。」
と俯向いて、袂を引く時、碁石を落して、
「消えたい、隠れたい、衰ですわ。」

「お前さんの名の通り、繪に描いた蘆は、成程鳳凰の着る蓑かも知れない。・ しかし、
・ 何しろ不思議な知己だね。」
「次手に言つて置かう、彼が蘆繪を知り、見て、且つ名を覺えたのは、先日東京を立つた神戸行最大急行の夜汽車の中であつた。・ 木菟は、驚やら、鷹やら、鳶やら、びらしやらとした孔雀やら、蝙蝠も紛込んだ夜半の暴風雨の巢の中を、もそ／＼と出て食堂へ入つたのは、それは眞夜中の二時頃で、豊橋のあたりであつたと言ふ。・ 誰も居な

い、正面しやうめんに（禁喫煙きんきつえん）の掲示けいじを置いて、給仕きふじが四人固にんかたまつて、饒舌しやべりながら、其その癖煙草くせたばこを喫きつして居ゐた。濱松はままつで最もう火ひを落おとした、煮焼にやきしたものは何なにも出で来きない。・・・湯ゆはあるから爛かんはつけようと、言いふから、酒さけを頼たのんで待まつ處ところへ、一人ひとりスツと入はいつて來きたのが、此この蘆繪あしゑ。

「ーとも無論むろん知らず、寢臺車しんだいしやの方ほうから、目覺めざましく容子ようすのいゝのが、と思おもふと、一人ひとりの給仕きふじが何なんと間違まちがへたか、ツカノと導みちびいて、「此これへ。」と掬すくふやうに其その婦をんなに腕うでを下おろして教をしへたのが、木菟みづくの居ゐたひとつ卓子タイプル、差向さむかひの椅子いすである。おつとりと逆さからはないで、「お許ゆるし。」とか、「御免ごめんやす。」とか言いつて、すなほに其處そこへ掛かけようとする途端とたんに、背後うしろから夥間なかまが二人聲ふたりこゑを合あはせて、「違ちがふ／＼。」と氣立けいたたましく言いつた。

「吃驚したらしく、「ア此方へ。」と、退くに連れて、何にも言はず、嬌態で會釋して、片側の椅子へ、――其處で、背後向きに優容に腰を掛けた。見惚れて、酒を飲むうちに、其方へは、誂へらしい、紅茶と、水菓子とが出た。が、すぐに女が、素湯を一杯、と頼んで、やがて持つて來たので、皓齒で吸つて藥を飲んだ。……飲むと、そのまゝ勘定を濟して、何にも食べたくはなかつたさうで、蜜柑を二つだけ、絹手巾に一寸包んだのを提げると、椅子を立てて。――と立つたなりで猶豫つたが、振向いて、振向いて艶麗に目禮した。

硝子杯を措いて、會釋を返すと、スツと襖を捌いて出た。

「南地だ。」

「蘆繪さんだ。」

と、がや／＼と給仕の言ふのが聞えたと思ふと、一人が飛出して、其の女の卓子に置いた林檎と芭蕉實を皿ごとチロリと取るのを見て、三人が六本又ツ

と白服しろふくの腕うでを突出つきたすと、ひよいと其その血さらを天窓あたまへ載のせて指ゆびでペロリと剥むいた目めが、林檎りんごより眞赤まっかに見みえた。

其處そこで、名も人ひとがらも覺おぼえたのであるが。――

「しかしね、蘆繪あしゑさん。」

碁盤ごばんに凭もたれて又話またはなす。

「大阪おほさかへ来た思出おもひでに、お前まへさんに逢あはせて欲しいと言いつて、素面しむいで、征矢そやを口説くどいた時は、極きまりが悪わるくつて冷汗ひやあせが出でたよ。――征矢そやが私わたしより、づつと少わかいんだからお察さつしなさい。勘當かんだう中預ちゆうあつけられてる叔父おぢに向むかつてヤケに遊あそばせろ、と言いふよりか餘程よほど弱よわつた。――負惜まけをしみを言いふんぢやないが、征矢そやの旅行りよかうをする處ところにさへ衝突ぶつからないで、二人ふたりで遊あそんで居ゐられたんだと、そんな野心やしんは起おこらなかつたかも知しれない。――とまあ、して置おくけれど、廣ひろい大阪おほさか三界がいに只一人ただひとり其その人ひとを便たよりにした征矢そやが、退引のつびき成ならない社しゃの用ようで、然しかも其その日ひの夜よるの汽船きせんで、神戸かうべから土佐とさへ立たたなけりや成ならないと言いふんぢやないか。

お前まへさんと食堂しゆくたうで一所しよだつた。あの汽車きしやが梅田うめだへ

着いたのは晝前十時頃だつて。……寒かつたね、實を言ふと、停車場へ出る時なんぞは、只友だちの顔を見ようばツかりで、一つ處へ出て来さうなお前さんの姿を、改札場から二はさうなんぞの野心はなかつた。

が、周囲が赫と賑かに成るにつけて、急に心寂しく成つたのも、蟲の知らせだとか言ふんだらうね。……留守か、それとも一晩泊で旅行でもして居やしないか、と妙に征矢が居てくれさうもない氣がして成らない。——マ、よ、居なかつたら、次の汽車で東京へ引返さうくらゐに覺悟をしたほど、——誰にも恩には被せないけれど、——私は一人旅が心細い。

毎日勤めて居るのは知れてたから、俾で、會社へ志した。——寢不足はして居るし、汽車の辨當で舌は荒れるし、寒さは寒し、兩側の看板に並んで通抜ける向風の面色は、もの干で吹曝されるやうで、ガタ／＼震へるくらゐだつた。——寒いなあ。車夫と、思はず言ふと、「然いで、奈良のお水取やさかいな。」と言つたがね、——譯は知らないけれ

ど、朝湯の風説より冷いよ。

道修町の會社へついた時は、石壇に、車夫を待たせた。征矢が居なかつたら、すぐに停車場へ引返さうと思つてね。――給仕に名刺を出して、一寸待て、で、事務室の方へ入つて行く半分洋服の白いのを見送りながら、まだ逢へるか逢へないかと、危ぶんだ、が、其の給仕が、向うでお辭儀をした、肩の締つた背後向で、卓子に向つて何か、かきものをして居るらしい男がある。其の背後姿を視た時は、こゝに血を分けたのが居る、と思つたほど可懐しかった、征矢なんです。」

「まあ、好かつたわ。」と、最う分つて居る事ながら、蘆繪か吻と安心の息を吐く。

「右へ向つて、。ペンを持つた手が擧る、と名刺を受取つたつけ、すつきりした片頬が見えたが、見る／＼心持聳えた肩は、春日山、此の若草山の十ウぐらゐ、腕で堪へて乗せさうに、力が籠る。・・・あゝ大きな會社を背負つて立つ、柱だ、さすがは頼母しいと思つた、が、然うぢやあ無かつた。私と言ふ不意の重荷が掛つたのを、心で堪へた、我慢したのが姿勢に成つて顯れたんです。

ペンを置いて、づいと立つと、袴で向直つた、が、引緊つた顔でずつと出て來た、・・・ト顔を合せて此方は最う魂を向うへ取られた、うつろな聲で、やあ、と言つて、だらしなくニヤリと成ると、やあと、幽に眦へ笑の影で、荷物は、と言つて、私の家ぐらゐ片手で引立てさうな確乎した片腕を最う恚う差出し加減で、つか／＼と玄關の石へ下りる。此ばかり、何も無い、と風車のやうな信玄袋を振つて見せるのを、ぐい、と取つて、應接室だらう、中へ入る、と慌てゝ、私は賃錢を渡したつけ。待つてた人

の好い車夫の老犬が、「逢ひなされたなあ、可い鹽梅や。」と髯斑な口で嬉しさうに和笑としたのを見ても、どんなに私の嬉しさうだつたかゞ知れるでせう。……

信玄袋を卓子の上へハタと置いて、「困つて了ひました。私は今夜土佐へ立たなければならぬんですよ。」と爽な聲で言つた時、ものに動ぜぬ征矢の、凜々しい目の驗へ颯と血の色が出たん　ぢやありませんか。

私は思はず胸が切つた。

「此で最う十分だ。」

と信玄袋を膝へ取つて然う言つた。――

其の信玄袋を、征矢が又引立つて卓子の上へトンと置いて、「何うにかします、一寸失禮。」「あゝ、心配しちや不可ません、」と言ふうちに最う見えなく成つた。――過ぎた事を、(何故、電報で打合せてくれない。)なぞと愚痴を言ふやうな男ぢやもない。圍まれた城なら敵を破つて出るのみだ。――此方も勇氣に引立てられて、逢つたばかりで歸るのを何とも思ひはしなかつたが、それでもね、滑か

な大理石の床が砂利で踏むやうに痛かつたのは事實
なんです。――。おつと三々に成りますね。」
木菟は、避けて一石パチリと入れた。

「給仕が来て御馳走ぶりに、ドン／＼焚いてくれ
る瓦斯暖爐も寒いやうな氣で居るうち、待たせまし
たね。」

小一時間。――抱くと私の身體より重いくらゐ
な、倫敦仕込の大外套を引抱へて入つて来て、
「残念です、八方電話を掛けました、重役とも熟議
をしましたが、是非がありません。」と面を正して
言つた、「しかし屹と何うにかします。」……
「飛でもない、何うにかするなんて。」「否、土佐
へ立つのは何うにも仕方ありません。が、何とで
もして四日間歸つて来るまで引留めます。」……
「……何にも言はず、」とに角、戸外へ出ませう。
而して食事を。……。」

此から歩行き出したが、私は、幾重にも、征矢が
心配をしないやうに、そして、晝飯を一所に食べて、
夜汽車で歸るのが決して不愉快な事ぢやあない、却

つて洒落てるから、と言つても洒落なんざ大嫌な征
矢がだから、洒落にしないで、心配をしてくれ
る。……から、其處でお前さんの事を言
た。――

言つた、が、極りが悪かつた。私は立停まつて、
電信柱を小楯に取つたんですがね、――何處だか
方角も何も分らなかつたけれど、後で聞くと、毎日
新聞の横を曲つた處だつたさうで、眞晝間です。
のつけに藝妓に逢ひたいとも、さすがに言出せな
いから、「御飯は何處で食べるんです、」も、とば
けて居ませう。

征矢は何の氣も付かないから、「其も考へてるん
ですがね、今新と言ふ金麩羅屋があつて、一寸うま
くもあるし、濱側で景色も變つてますから其處にし
よう、と思つても見ましたが、入込ですから――
些とでも落着いて、話をしたいのには。……
矢張近處ですから鶴家と言ふのにしようと思ひます。
が、何ですか、註文がおりますか。」「――恚
う問はれたのには少なからず弱りましたよ。」

「唯、行詰りながら、「其處は藝妓が呼べますか」サ、何うです窮したものでしたな。「さあ、呼べませうが、其の方は別に算段がしてありますから。」で、尚ほ弱つた・・・牛屋の割前のあとが、おい、お互に羽織を脱がうぜ、紐を取つて置く事さ、くらゐは腕の古疵、覚えのある強兵だけれども、素面で、眞晝間で、町の角で電信柱で、剩へ風立つてヒユウと寒さが身に染みる、汽車で外套が皺だらけで、凹んだ信玄袋を紐長にぶらりと下げて、日向でまぶしくツて、砂ぼこりで鼻をしがめて、トやつた處が征矢の方が、づつと年下で居て、脊が高いんだから、形もつかないや壺も嵌らず。こゝで口説くのは、奥同者が本願寺を拝んで、あの屋根を歩行いて見たいと言ふやうなものでね、「實は、」と言ひ出すと胴震ひをして、汗と涙が一所に出る。

いや、笑事ぢやあない。

・・・だから、其の蘆繪と言ふのを視せて下さい、そして一所に晩まで飲めば、大阪に思置く事

は誓つてなし、君は、神戸へ、私は東京へ、擦違ひに――と事實決心をした證據は、相手のあの大な目を屹と視ながら談じたので分ります。

――人が見て通りまさね、辻に突立つて居るんだから。――

馬鹿も、此の位に成ると超越と云つてね、一つ上を通越して、人に眞面目な心配をさせます。――と、彼は獨言に成つて歎息した。

「此の日其のおのぼりに封して、吹曝しの辻に立ちながら、征矢は苦笑もしないで、眞面目に心配して、……知らない藝妓だ、それだし會社の便宜上、曾根崎の方には萬事を承はらせる茶屋もあるが、南地は宴會で知つてるばかり。……何しろ、今朝一所の汽車で大阪へ歸つた婦が、つい、おいそれの間に合ふか覺束ない。しかし、北の仲居に元老株のきゝものがある、腕を振はせて見ませう、と鶴家で食事をしたあとを、北の、あの百川へ出掛けたんです。」

「お身體も、貴方、それに氣づかれもおましたや

る。・・・藝妓はん大勢の中で、酔つてお了ひ
なさいました。お酒の花が満開頃にな。征矢さんが
ずつと立つて、私を一人別室へお呼びやして、あの、
凜としたお聲でな、――「蘆繪さん、」と更まつ
て、「僕が土佐から歸るまで、あんじやう引請けて
下さい。」とお袴に手を恚うおつきなすつて、あの
目で顔をお見やしたばかりで、私は最う身體をも
忘れて了ひました。恥かしい事ですけれど、内證は
な、世話に成つて居ります人と、出るわ、引くわの
悶着があつて、身の上の相談に、東京の芳町に待合
をして居ます、姉の許へ、相談に行つて歸つたばか
りの處でした。けれどもな・・・あゝ、心易う
て言ひました、貴方、まだ御心配なさいますな。あ
の、凜々しい方が、私のやうな、こんなものに、貴
方を頼むと、膝を正してお言ひなすつた、志で、二
十五の此の年で、殿方の氣がはじめて分つて、夜が
あけたやうに思ひますわ。」

と忘れたやうに、碁盤の端へ頬杖しつゝ、無意識
らしく一石黒をカチンと繼いだ。

「ま、此の延びた事をお見やす。うつかりノ、お

話して居て、
・ ・ ・ ・
何處までも、
・ ・ ・

・ ・ ・

唯心付くと、石は、白と黒をづる／＼と、幅二寸
くらゐに繋がつて、盤の上をずるりと這つて、暮れ
かゝる色に冷く輝いたのが、鱗の小蛇に紛つたので
ある。――と言ふのも後に心付いたので、其の時
は何とも思はなかつたさうであるが、艶々と盤が光
つて、・ ・ ・ ・ ・又何となく其處へ人影が映したや
うに思つたので、ふと目を上げると、襖を細目に、
影のやうに立つて、蒼白い瓜實顔で、頬に片手を添
へながら、やゝ打傾きつゝ差覗く、早や天井の夜を
籠めて、黒髪に黄昏の色を吸つた圓鬚の婦があ
る。――

「片手頬をば支へた手首に、市松らしい友染縮緬、
裏の淺黄が冷く搦んで、凄いやうな、盤面の石も此
の影か、瞳が大きく、すらりと脊が高い。」

木菟は一目見て、一室に大勢の膳を並べて、唯一人寂しく居た先刻の婦人を思つた。

「お樂みどすな。」

と、爾時言つた。

「如何です、貴女も。」と、つい言つて、盤を向

けて一膝開いた。

「御免やす。」

と、すつと入る。．．．．．

「蘆繪さん、お願ひなさい。．．．．．貴女、

此方は本當のが打てるんですから。いや、敗

軍々々！」と陽氣に饒舌つて、遁げるやうに、も

う出来てる置炬燵へすぼりと入つたのは、避けたの

でも何でも無かつた。木菟は、――不意に顔を出

したのが、征矢ならば、と思ふと、急に寂しく成つ

て、一人で、ものを思ひたかつたのである。

海が見える。

渡を打つ。

水の色が襖に映つた。

猿澤の池が面影に立つのであらう。

霞の中を、供奉して鳳輦のきしるのは、晝見た繪馬堂の額の土佐繪の幻である。萌葱の筆彩、黄金の剛毛。

荒海の船の甲板に、すつくと一人外套の黒い姿は、征矢の影、朝日がさし、夕日が映る。

怪しく美しき鳥の、嘴を接して、幽に囁く如く婦二人の聲を聞き、盤は花園に似て、袖の花咲き、手の蝶の戯るゝのを見つゝ、彼は虹と成つて、うと／＼した。・・・

「あ、失禮、頭痛がして、ま、こんな事。」

と、言ふ聲を現に聞いて、ふと我に返つた時、蘆繪が、金口の女煙管を、吸つけて、ト向けたにつれて圓鬚の婦人が、生際つめて額を結へた紫の煙管筒を解くのを視た。透通るばかり白い顔の、蒼褪めたのも一つは其の色の映るのであらう。市松の襦袢の淺黄がまたチラリと照つた。

「やあ、寝ましたか。」

膳は赤く、銚子は黒し、猪口は藍、蘆繪に燈は紅

かつた。

「客は歸りましたか。」

「は、強い方だすな。」

「一暮は、………」

「まだ、さしかけでしたけれど、……何處へ行かはつた。見えん言うて、わつと向うの座敷で大勢で騒ぎ聲がしますとな、よう言うて、すぐに、隠れるやうにお歸りでした。」

「連が來たんだね。」

と木菟は、其處に給仕に控へた小娘に向つて言つた。

唯、小娘が優しい目を細りと仰向くやうにして、

「あの、御寮人はんどしたら、お連は誰も居やはりまへん。」

「澤山膳が並んでたぢやあないか。」

「大勢はんは團體の方です。」

「否、最う一つの座敷にも。」

「へ、あれどしたら、御寮人はんが、影膳を据ゑはつたのだんね。」

「影膳を。」と蘆繪が訊くと、

「へい、影膳言うても、旦那はんのお留守のやないのどす……志の佛はんやらな、お友だちの分やら、生きとらはるにも、死なはつたのにも、心に思ふお方々に皆供へるんや言はゝりましてな、……」

「馴染の客かい。」 「へい。」

「ぢや、奈良見物ぢやあないのだね。」

「京のお方やさうどしてな……見物やおまへん、毎月一度づゝ生駒はんへおまゐりやすな、其の途中にお寄りやしては、一遍々々、敷を殖してな、お膳を揃へはりまんのどす。」

生駒は、音に聞く、罰、利生、験顯に、凄く恐しき聖天の御山である。御堂に籠つて、女の、捌髪が蠟燭を結へて炎を燃し、男の、掌に油を湛へて燈心を點しながら難行をするのもあり、一足だちと稱ふるのは、麓より絶頂までを一足歩行いては土に跪き、立つて一歩しては坂に跪きする。御堂までは三日三晩、其の間一眠りもせず、一休みもせず、茶屋の男の都度々々に運び来る湯水を、合掌の手も解かず、手よりして口に受けて、息繼ぎ／＼砂利に石に、血

だらけに成つて行する男、女の數も多いと一言
ふ。

何となく、蘆繪と顔の見合された時、廊下に賑か
な登音して、襖を開けて三人、色々に顯れたのは、
木菟に退屈をさせまい心づかひで、蘆繪が計らつた
土地の藝妓であつた。

木菟は酔潰れたゝめ、京の御寮人と言ふのに就
て、其の夜は蘆繪とも何も話さなかつた。あくる朝
は遅かつた。湯に入つたあとを又酒で、隙間も漏ら
さぬ六枚屏風。

炬燵に蘆繪も貸褌袍で、爪弾の、

忠兵衛が、――

旅店に取つては、志す人に膳を据ゑて、一人寢の
京の御寮人より、此の二人の方が怪しい、苦しまぎ
れの鼻唄で、毒藥でも飲む心中だと思つたら
う。 手代、番頭のソツとぬき足で入つて
は、十疊の隅を圍つた屏風の裏で、踞んで立聽をし
たのは事實である。

日もやゝ傾く頃、煮こぼりの溶けたやうに成つて
炬燵を娑婆へ出た顔で、欄干越に猿澤の池の水に吹
かれながら、興福寺の鐘樓の屋根に留つた鳥とも成
らず、外套とコオトで並んで發つた。

昨日の座敷は、團體方も、御寮人分も、掃いたや
うに何にもなかつた。

さて、停車場で乗り遅れて、引返して入つた一膳
飯。――話は京の清水の麓、松原の中なる、玉芝
の蘆繪と寝つゝ、夢に魘されて目を覺した。夜中の
木菟の胸の裡に戻る。

「然うだ……」

木菟は亂れた夜の媚めかしい、が惱ましい閨の裡で、

「碁石を拾つて、蘆繪が袂に入れた時、一寸頤で押へるやうにして、四五枚懷中にあつた繪葉書を見付けた。猿澤の池のほとりの旅籠屋で、東京の誰彼へ出すつもりで、私か書いたのを、途中で郵便函へ入れて遣らうと預かつたものだつけ……「あ、浮り忘れしました。何うしませう。」と、何、構ひはしないものを、何うせ此から行く停車場で出せば可い、と此方の言ふ間も待たないで、衝と土間へ出て捜足を草履へ引掛ける、と隅の板前に居た一膳めしの女房が、「もし郵便函は右隣りの小路の角だつせ。」「大きに。」と、コオトの裾をしつとりと、しかし急足に暖簾を分けてスツと出る。あとへ茄子の溝漬が、ばちやんと音のするやうに跳ねて行く。

此方は手酌で注足して、一口飲つて試ると、ひどい酒で、舌の尖から、いきなり脳天へピンと來る。

さすがの意地汚も銚子を睨んで溜息を吐いた處へ。

其處へ持つて來たんだ。玉子焼を、――女房が

汚れた上被りの、あの諸手でガチヤリと皿を卓子臺

の上へ置いて、「お連は南地の藝妓はんだんな。」

と上目づかひをして言つた。「分りますか、無論、

私は旅のものだが。「え、そりや風體が、もの

を言ひますさかい、……旦那はん、お喜びな

さらんとなりまへん。「何をえ。「何やかて、

南地の藝妓はんが、こないに勤やはる事言うたら、

眞、見たうてもありまへん。……そら、貴客、

横のものを縦にもしやはりまへんえな、ツンとして

首を据ゑはつて、「と其の据ゑた顔を、俄然と崩し

て、「えへ、」笑つて、ずた／＼と引退

る。……此奴茶代を奮發ませるとは、思つた

もの、南地の藝妓の働き振。成程と、あの時も頷

かれて、見りや、狐色の玉子焼。其とても心づくし、

仇にはしまい、とイラメを掛けないばかりに、渦巻

に焼いて薄く切つたのを、ト一口食ると、ガサ／＼

と口一杯に成つて、何うやら硫黄でも嘔むやうなの

をぐツと嚙んだ。が、其ばかりなら、恚うまで胸に

は支へなかつたらう。……小兒にゴム鞠を買

つて持たせて、其の時歸つて來た蘆繪が、煤の裡の
玉子焼を氣懸りさうに覗いて、「あ、切つて來まし
たな。」と言ふと、密と手を掉つて、「およしやす
や、此は。．．．．筋向うの玩具屋の店から一寸
振り向いて見たらな、女房さんが庖丁を あの前垂
で、．．．．」

私はぎよツとした、いま其處へ坐つたあとが、じ
と／＼濡れてはゐなからうかと思ふやうな汚腐つた
前垂で。．．．．「べた／＼拭いて居るのが見え
ましたから。．．．．先刻お肴を見に行きました
時、土間へ庖丁が落ちて居ましたよつて、．．．．
使はれては困る、と思つて、玉子焼は切らんと、と、
然う言つて誂へましたものを。」と眉を顰めた時は、
も此方の咽喉へ引替つて、此奴がごくり／＼と、
蟲唾と／＼もに胃の腑をさして下りて行く。

言へば心配を掛けようと、其のまゝ黙つたが、變
な心持で、口も利けない。あんな時は酒だが、サ其
が飲めないのだから弱つた。．．．．元氣がない
と、蘆繪も悄氣で、冷い瀬戸物の火鉢に兩方から押

被さつて居たのは惨憺たるものだ。

が、時間が来る、……直ぐに出る、……
・ 汽車へ乗る。並んで掛ける。驛々も名所の名で、
暫時紛れて居たのだつたが。

「……待てよ、鴨や鰈の所爲ではない。……
宵に此の玉芝の奥座敷で、……あゝ遣つて、」

思出す目を上げて、空に見當をつけようとする、
グイと口へ吐上げるのを、アツと又俯向いて 木菟
が壓へて、

「……あゝ遣つて、と然うだ。碁石を拾ふ
と、忽ち、得も言はれない臭氣がして、坐つて居ら
れないで、恚う胸を密と横に寝かした……碁
石が臭ふ譯はない。

確かに、かの碁石と一所に、一膳飯の玉子焼の缺片
が胃の腑で生返つて、腐つた臭がプンと來たん
だ……然うだ。」

「清涼劑にも成らう袖の香で、頭を抱きさうに擦寄つて、何うかしたか、と狼狽てるほど聞いてくれる。……いや、何でもないが、少し寒気がする、と紛らかした時……。世辭のつもりか玉芝の女中が、更まつた挨拶をした。「貴女はんな、内の女房はんがお目通りせんなりまへんのどすが、少々加減が悪うて、引籠つて居りますよつてに。」「何ういたしまして、それは不可ませんね、餘程お悪いのですか。」と蘆繪が訊くと、「ほん、ぶら／＼してどす、氣鬱見たやうに、陽氣が悪うおすよつて……。旦那はん少しお休みしたら何うです。」で、次手に病人のお夥間入は可厭だったが、何、氣鬱の症と言ふんなら、一寸附合つても可いやうな心持がしたので、「其では願ひませうか、」と言ふと、……。御氣分が直つた處で又お飲りやす。――其が可うおすな。」と二人ともに口を揃へた。「夜が長うおすさかい御緩り、」と、女中が支度をしに立つた後でも、此方は氣の毒なほど黙つて居た。

嘔氣ついて堪らない。

處で、あの時にも、一度うと／＼したつけか、二階へ上るのに繪かと思ふ蘆繪の姿に、手を曳かれ、
・ ・ ・ ・ ・壇の途中で、白い顔が優しい目で、
振返つたのを覚えて居る。
・ ・ ・ ・ ・

いま、此處に寝て居る顔だ。
と思ふと、何やら今更らしく、我がものゝやうな
氣がして、取ツときの人形でも見るらしく、頻に可
愛く、可懐くなつて、肩をぐたり、と徐と其の重い
頭を捻向けると、睫毛ばかりが、ひそ／＼と囁くや
うな、幽な寢息を浮かせて、亂れた胸は白い陽炎の
風情がある。

「床へ入つても、總毛立つ寒さに、足で炬燵
に、
・ ・ ・ ・ ・しがみついて、胸を十文字に確乎と
手で壓へて倒れた。肩から背をさすつてくれた。此
の手が、夢を繪にした蝶々のやうに、恚うふは／＼
と目に見える、其に搦んで、惱ましく切ない、此
方の胸が黒い、蝶に成つてぶら／＼した。
・ ・ ・ ・ ・一膳飯の女房
南地の藝妓にこんな介抱。
・ ・ ・ ・ ・

の言葉につけても、と思出すと、玉子焼が硫黄の臭
氣。唇を噛んで堪へるうちに、びつしより身體中へ
粘々とした汗が流れると、其で幾干か胸が裕けて、
すう／＼と呼吸も樂に成ると、あゝ、あれから一寢
入か。――

――しかし、夢中にも、寢苦しさは、雨の音
が障子を敲いて、ばら／＼と飛込むのが、顔に手に
足に亂れかゝつて。

まるで、碁石を取つて、擲付けられたやうだ。
と思へば、新に又もや堪難い臭氣が鼻を衝く、腹
に碁石が固つて居る如く、手で撮んだけでも、あ
の可厭だつた、何とも言はれない臭氣が、腦に染み
て、どろ／＼と耳まで流れる。

「吐かう。」

木菟は、腰を落したが、肩で息して居直つた。

「宵からも、何よりだ、吐くに限ると思ひながら、
連の憂慮を苦しんだ。斷つても醫師騒ぎをする
に極つてゐる、と氣の毒でもあり、面倒だし、體裁
も悪し、無理に堪へた。……丁ど寢て居る。」

此の際に。……五臓の神は何がために俺を起した。吐けと言ふのだ。嘔せと教へる。それなのに、今まで、何をし、何を思つて、何だい馬鹿な。」

嘲笑ふやうな、我ながら木菟は氣味の悪い青い顔して、肱で一度、枕に倒れながら、枕頭の時計を覗くと、ぶる／＼と脈に響くばかりセコンドを刻んで、夜は恰も二時である。

殆ど言合はせたやうに丑満の鐘が聞えた。

「知恩院か。」

「耳を澄ますと、雨戸越の松の梢を、波を打ち／＼、遙に鴨川に傳ひ、近く東山を繞る氣勢して、音の餘波は蘆繪の黒髪のほつれに響く、……心付けば、風も雨も幻なりしか、其とく、何時の間にか留んだらしい。雨戸にそよとの聲もない。帯を締直して、づつと立つて、ふら／＼と成る、トタンに、ぐわツと胸許へ嘔上げる。」

「えゝ、我慢しろ。」

と思はず、聲に出て、熟と胸を壓へながら、木菟は襖を開けて蹠跟と次の室へ出ると、ぢいんと疼いばど頭が寒い。で、春の夜を友染で蒸すばかり紅の闇を見棄てたとはなく、艶なる婦の花に眠る霞の中から、急に坊主にされて追出された形があつた。

向合つて、襖を閉めた別に一座敷があつて、縦の六疊らしい此の次の室を横に取つて、階子壇がある。其の拭込んで澤の出たのが、襖越しの電燈で、薄白く霜を置いたかと思えるのを、捜足で冷く蹈んで、胸震ひをしなから、片手を壁に縋り／＼、穴へ落ちるやうに、やがて、ひよろりと下りると、下が板敷。一方が壁で、一方は（ー）ー其處から納戸が住居へ通ふらしい。（ー）視で、取着にづらりと、まだ木目の薄赤い、新しい雨戸が見える。

「何でも、あの邊、」

其の何處かを開けると、廁へへ行く路がある筈、

と宵の見覚えを辿つて、雨戸についた其の廊下へ、
手繰着く思で、わく／＼して急いで出た。が、唯、
薄明で見ても、開きさうな箇所が無い。立てつけも
密に犇々と閉つて居る。

稍忙いて、恚う■すと、廊下を劃つた突當りの硝
子の嵌つた一枚の扉戸があつた。

「彼處だ。」

其の扉の前に、室咲の紅梅の、幽に色を残した、
樹は古く、桃色に黄を交せて乾びついて咲いたのが
ある。四邊が武藏野だと、薪に折添へよう。・・・
・所がらとて、銘をば歌屑とでも言ひさうな、と
宵にちらりと見覚えの、・・・それ／＼剥製
の鶯を一寸枝に留らせた、――此があるからには、
二人が鴨を煮た座敷に相違ない。

「此處で廁の見當を。」

で、可なり大きい、其の鉢植と、摺々に戸を開け
ようとして、偶と覗くと、裡が續いて縁に成る、が
障子の閉つた座敷の前に、上草履が對に二足、揃へ
て二足脱いであつた。

「あ！」

と木菟はぎよつとした。

「ー讀まるゝ方々、御察しが願ひたい。ー

此を思へば、階子の上口に、自分たちの使つた外にも、最う二足脱いで在つたやうでもあるし、下りた處の襖際にも、封に並んで居た氣がする。・・・要するに、此の玉芝は、うか／＼と木菟なんぞが、一人で泊るべき家ではなからう。僥倖に草履の一足が居るとしても、何は措いても眞夜中の今時分滅多に歩行くべき廊下ではない。

「・・・弱つた。」

第一、閨の戸を敲いて、用場を尋ねようなどとは思ひも寄るまじき事である。

「さあ、弱つた。」

此に懲りよ、木菟。ー四五年以前に、一度西石垣の旅館。某樓へ宿つた夜半にも、おなじ事で、座敷々々の對の上草履に、八陣の如く引包まれて、七顛八倒した覺えがある。ー

あの、すや／＼寝入つたものを、三日四日の疲勞もともに、罪も報も忘れて居るのを、封丈襦袢唯一重、衣服も着ねば成るまいし、扱帯もせずば成るまいし、其を揺起すくらゐなら、はじめから扱て恚うぢやない。

思切つて起した處で、汚い音を聞かせたあとの、又この人の心づかひ、人騒がせの夜更を思へ。

寒さは寒し氷を浴びる、胸には硫黄が沸上る。水も火も一齊に、ぐわち／＼と身震しながら、情の牢と、正面の雨戸に縊つて、やあ、ふし穴が目になれ、と破つても出たさうに藻掻くうち、其の節穴がひよこ／＼と動いて縦に並んで、字になつたかと思ふばかり、ふと一枚、細長い紙を貼つて、雨戸に字を記した箇處がある。

色消しだが、喘ぐ息と、鼻息と、切ながりの涙で、曇つた目をニいて、熟と視ると、巳の字が五文字。
・
・
・
・

(巳、巳、巳、巳、巳、)

其處の通縁は、樹立繁き庭に面して、雨戸と言ふものゝ設がない。此の深夜に、開放しに成つて居て、折から鐘の音が誘ふ、風の音もなかつた、が、夜氣は冷かに面を打つて、頭には石を負ひ、胸には火を包んで惱ましい中にも、心は確に、目は爽かに、何うやら火宅を遁出たと言ふ氣がして、片側を視ると、磨硝子の戸の鎖したのが、ずらりと續いて、松を籠めた有明の電燈に、宛然月影の映す風情がある。

突當りは眞暗で、穴のやうだが土間らしい。

ぼツと、内側から薄紅の、硝子戸に浸出するのは、京の女の肌を浸す、滑かな湯殿であらう。――其處から斜違ひの庭前に、夜目には確と分らぬけれど、葉がくれに見えて、ほんのりと、白い手拭が掛つて居る。手水鉢に相違あらじ。

嬉しや廁が、と、つか／＼と行くと、ものは果して其だつたが、あゝ、上草履が、戸の外に整然と一足脱いであつた。實は、湯殿の前にも上草履が見えた、――が、置忘れたのであらう、今時分、誰も

湯に入るものは無い。いづれにしても、其の方は氣にしないで済んだけれど、此の廁の前には、八夕と又吐胸を吐いた。

断るまでもない、唯一足、が、一足だとして何う成らう。

尾籠ながら、……最う我慢が成らぬ。

唯、偶と前に在る其の眞暗な土間に氣が付いた。

恚う、妙に陰氣で、濕っぽい様子が、客用にあらぬ、俗に言ふ下後架が何うやら在りもしさうな氣がしたので、柱に掴まつて爪尖探りを行ると、庭下駄やら、臺所穿やら、とに角穿物が觸つたのを突掛けて、のめづるやうに土間へ下りた。が、暗い事は、鼻を撮まれても分らぬ。

いや、不恰好さは御察しに任せる。……木菟は、わく／＼した手搜りで、其の搜す手がいきなり便器に打着つても、もう構はぬ氣で、下駄を引摺り／＼且つ恥を言はねば、理が聞えぬ、ふん／＼と嗅ぐ。が、一生懸命だと、暗い中に、何か有りさうな、ものゝ形が朦朧として、皆手水鉢に見え、便器

に見える、だけなら可けれど同時に其が、残らず、澤庵桶に見えたり、大な鍋に見えたり、摺鉢に見えたり、然うかと思ふと先刻の紅梅の鉢植に成つて、鶯がひよいと留つて居たり、上草履が並んで居たりする。……

浮り、こゝへ便ようものなら、馬だ、驢馬だ、犬だ、怪ものだ、いや狂人だ。夜が明ける、と京洛中の騒動に成る。

が、最う堪難い。

「弱つたな、此は弱つた。」

つい情ない聲を出して、其處は斷念めて、半分泣き／＼、蹠跟々々と後へ戻ると、然うでもない。もしや此の間に、と空頼みにした例の草履は、鼻緒に根を生じてぴたりとして、一寸も動かず廁の前に納まり返つて居る。

木菟は縁へ上る元氣も失せて、框の柱にがツくりした。

其の時であつた。

ばツと鳥影が映すやうに、人氣勢がしたので、偶

と顔を上げると、湯殿の前に、背後向に立つた、半身の婦の姿がある。……餘程靜に戸を開けて、其處へ出たが、此方が苦しいので夢中だったのか。……氣のついた時は最う其處に、――
雫の音もしなかつた湯殿の裡が、此の時二度ばかり、ざあと鳴ると、暖い湯の香に添つて、黒髪が芬と薫つた。

婦は、紐一筋なしに、トぼつと全身に湯の霧を、柳の絮の散るやうに絡つたが、ふくらみを腰に示した肉の繋つた肩なぞへに、撓やかに落した手に、濡色の、青白い、手拭をだらりと下げた。ソ其の手拭の端だが、一つ撓んで、上へズル／＼と巻いて、によろりとして、且つ尖つたのは鎌首で、長蟲である、蛇である。

「あ……」

「左の手にも又一條、ずらりと畝つて、コと鎌首
を立てたのを、……世に實にあるまじき事な
がら、淺ましさは、餘りの思掛なさと、目覺しさと、
膚の白く美はしさとに、我にもあらず、只視つゝも、
婦の艶やかな圓鬢に心付くと、何故か昨日の暮方に、
奈良の旅籠屋で、蘆繪と碁を打つのを現に見た、其
の御寮人と言ふのに似た、と思ふ時、動くか、膚の
色が筋を薄紅に颯と冴えた。と同時にたら／＼と二
條の蛇の鱗が光つて、一つは碁石を揃へて黒く、一
は碁石を繋いで白く、アレ揺れる、女の指が細く長
く、輕さうに尾を取つて、柔かに撮んで然も肩より
して脊筋、脇、胴のまはり、腰ふくら脛にづつしり
と蛇體の冷い重量が掛る、と、やゝ腰を捻つて、斜
めに庭に向いたと思ふと、投げたか、棄てたか、蛇
が消えると齊しく、黒髪影は長き裳の如く、圓鬢
の容は大なる袖に似て、颯と眞綿に濡色の婦の姿を
隠蔽して、松の影に靡くかとすれば、湯殿の燈がパ
ツと消えて、忽ち縁の其處が眞暗に成つた。

カタンと扉の音、出入口は（巴巴巴巴）であらう。

ざわ／＼ざわ／＼と鳴つて、空を揺る庭木の響。放した蛇は、土を這つても、梢をば傳ふまい、風が出たのであらう、手水鉢の手拭は、暗中から白く顔のやうに此方を覗いて、ひら／＼と嘲笑つて、吹添ふ風が黒く、而して、むら／＼と腥く鼻を衝いた。

電光の切目の如く、フト忘れた、胸の悪さを、錐で挟るやうに思出すと、最う堪へられない。今は外聞も恥もない。

からり、と扉を開ける、と男用の青い便器に逆に成つて、眞黒にしたゝか吐いた。玉子焼が生のみまゝでくる／＼と舞つて落ちた。木菟は両手を瀬戸煉瓦の壁に縋つて、ぶる／＼と震へたのである。

「ガツ／＼ガツ、げツい、げツい。」
時鳥も五位鷺も一所に鳴く。やがて目も鼻も口も、首も手足も一縮みに、木菟は圓く成つて、縁の手水鉢の前に踞んで居た。

「何だ、誰も居ないぢやあないか。」

入つても、出ても、上草履は舊のまゝで、廁には
他の人の氣勢も無かつたのである。

漸と人心地。

「言語道斷、夜中にあんな事をする婦だ、自分が
湯に入るのに、横隣の便所へも人を近づけないため
に、計略の藁人形……」

と獨りで苦笑したが、また思ふには、

「いや／＼、世の中に何を間違へたつて、蛇を二
條兩手に提げて、裸體で玉芝の廊下を歩行く婦のあ
らう道理はない。――雨の繁吹が碁石に成つて、
ばら／＼身體へ降懸つた気分も同一で、胸にこだは
つた不潔な汚い不消化物が、吐出すのに先立つて假
に幻に顯れたのだらう。」

其に違ひない。……すると、魔法使だ、仙
人だ、凄いものを飲んで居た。逆もの事に、蛇は遁
げて婦だけ胸に残れば可い。「
と半ば串戯らしく思ふのも、や／＼胸のすいた嬉し
さであつた。」

藁わらで庵形いほりがたの屋根やねを組くんで、竹たけの水車みづぐるまを仕掛しけ、引ひ出しにして手拭てぬぐひの切きをくる／＼と砧きぬたに巻まいて軒のきに掛かけたのを、引ひくと、くる／＼と廻まる時とき、カチ／＼カチりと何なにやら音おとがする。

鼠ねずみが憤かじるのではない。

「鶯うぐいすが密そつと嘴くちばしを鳴なすのかとも思おもへば、美うつくしい女の幽かすかに齒は軋ぎしりをするかとも聞きいて、聞き澄よましても留やまないのである。

カチ／＼カチ／＼と冴さえ々／＼と細ほそく響ひびく。

「否いや！」

渠かれは愕然がくぜんとした。

腹はらで暮石こいしが鳴なるのではないか。

「馬鹿ばかな事ことを。」

が、實際、耳を脈に附けて、熟と聽入つたほど、何とも知れぬ其音は、絲が絡みつくやうで、木菟の身を離れなかつた。

けれども、可厭な言でも、不快な音でも、氣味の悪い音でも何でもないので、凄く、綺麗で、細く、可愛らしく、而して寂しいのは、象牙づくりの雛が手拍子を打つやうで、傳説の中の姫が、世に漂泊ひて四ツ竹を鳴らすやうであつた。

餘り唐突な譬喩は、言葉が幽玄、凄艶に似ても、藪から棒に人騒がせをするやうで、聽人を驚かすのである、……が眞個、聞澄ました時の感情は、譬喩を誤らなかつた。

……桐の箱から、眞綿を解いて出したやうな、京の祇園の舞妓が二人、眞暗な樹の下に立つて、黒白の碁石を一石づゝ手に持つて、玉を刻んだ前齒を敲いて居た一。……其の音である。

……
恐らく、此の事實は、單に、カチノ、カチリと

鳴る丑満頃の幽なものゝ音響を聞いたばかりで、雛
が手を打ち、姫が四ツ竹を鳴らすと聴取つた荒唐な
想像よりも、一層讀者を驚かさう。

雖然、其の實際に衝撞つた木菟の驚駭は、讀者が
聴いて驚かるゝくらゐな事では無かつたさうである。

で、先づ、錦、綾、友染、金の絲、銀の絲、玉の
飾、花簪、京風の鬘、だらり結び、振袖濃い笹色紅、
揺れるとちら／＼と眞紅な、此の極彩色の舞妓、繪
の如く暗夜の庭に、假に立たせて頂きたい。

場所は庭である。が、飛石の上、石燈籠の傍でも
なく、窓に梅の枝の葉をはら／＼と宿した離座敷の
圓窓の前で、東山つゞきの土の上である。

丁ど、木菟か土間へ下りて、搜つて歩いた其の
土間は、此の縁側から右の方へ畝るので。舞妓の立
つたのは、反對に庭へ出た其の取着の處で、離座敷
へは歩行板も橋も無しに庭下駄で傳ふ詔への、其の
梅松の葉がくれの、暗い緑の如き庭前である。

其處に舞妓が、袖も友染の封に二人、暗の中に、
靄に包まれて白く灯れた、燈心の土器を、緋に花の

刺繡ある襟許に捧げて、片手に据ゑつゝ、黒く、白く、紅と笹色の唇を、前歯を、碁石で敲いて居た。

木菟は、框際の、其の柱に掴まつて見たのである。

ほのかに映した、葉に桃色の蝶のやうな、燈心の灯も一つはしるべで。

……はじめ、木菟は、床しい、微妙な、微かな音に、打傾き／＼、つい二歩三歩。と松に、ちら／＼と掛つて、軽く絡はる霞の灯影に、思はず、つか／＼と出て庭を覗いて一目視た。

其の光景を思へ。

餘りの事に、柱に縋つて、半身を、松の葉摺れに、ひやりと濡れながら、ぬいと出す。

唯、緋桃の花片戦ぐとばかり、揺るゝのは碁石を叩く前歯のみ、水晶に黒く漆したやうだつた二人の雙の四ツの瞳が、昆蟲の如く輝いて、ちらりと動いたと思ふと同時に、

「何や。」

「怪體な。」

「誰や。」

「好かん。」

呼吸を揃へて、物と吹いた、燈心がフツと消える
と、薄くなる間も、霞む間もなく、パツと立處に姿
が消えた。暗がりの裡から、颯と狙つて、礫が飛ん
だ。

……礫が飛んだ。

一 其の一個は外れて、柱に迸つて失せた。が、一個は八々と冷い蟲の膚觸りして、頬を撲つて、ヒヤリと襟に落ちた。

「あッ。」

と飛退つて、木菟は身悶えをしながら手で胸を捜した、其の間の不氣味さと言つてはない。飛込んだものは蛇の首で、搦出すものは守宮の尾であらうと思ふ、氷のやうな汗の流るゝ心地で、ウと握つて瘻攣りながら、ぶる／＼と戦慄く掌を、燈に透かすと、黒い基石で。 . . .

唯見ると、奈良の一膳飯で見たと同一に、薄青いのと、曇つた金と濁つた銀の摺込みの横縦の柄がある。

が、怪んで確と認める餘裕はない。何とも異様な、悪腥い、其の臭氣と言ふものは。 . . . 庭へ振飛ばすと、ざらりと黒い鱗を立てゝ、青い腹を翻して、ずる／＼と。蛇に成つて這つて行く、 . . . と思つた。一呼吸も堪へず、鉢前へのめつて、又し

たゞかに、どろ／＼と吐いて／＼吐出した　・　・

世に祇園の舞妓を視て、風流にも、碁石を取つて礫に打たれて、ために、したゞかに吐いたものは他にはあるまい。沙汰の限りである。

いや、お話に成らぬ。

「不思議だ　・　・　・　が、皆食つたものが化けて出たのだ。」

要するに、餘り身に相應はな過ぎる、美人とさしむかひの旅行をしたゞめ、愚にも附かない食ものなんぞに可恐しく刺戟をされた、神経衰弱、俗に云へば脾肝煩ひ。　・　・　・　これが小兒だと、蟲の所爲で、偶、とろ／＼とした春の宵など、何うかした工合で、一人寂しく縁側、框などにゝむむことがあると、隣座敷を白犬がスツと通る。　・　・　・　思ひ掛けず兎が飛んだり、可厭なのは、黽かツウと切つたり、馬がのそ／＼と出たり。地獄か畜生道に落ちたのかと可恐しくもなれば、また世界の話など聞いたあとだと、フツと駱駝が歩行いたり、黒奴が乗つたり、

赤い頭巾を着て居たり、鵠の鳥が鬚を長く生して
鱧を狙つたり。空虚な八疊敷がパツと沙漠に成つて、
心細さに泣出すかと思ふと、萌葱の簾の垂れた蒔繪
の長轅の駕籠が見えて、官女が白衣、緋の袴で、小
さな金の釜、銀焔爐、紫の袷紗まで調つた、茶箱を
擔いだ奴が供して、仕丁が臺傘、五人囃子の笛鼓が、
曠野か峰かと思ふ遠くから遙に聞ゆる合方に連れて、
疊のへりの清い處をスツと曳いて通る、はゞ、雛の
行列、と可懐しさに、おのづから玉のやうな美しい
涙がはら／＼と溢れるかと思ふと、繪本の通りの鼠
の嫁入が、スター／＼と落着澄まして行くのが、面
白くつい莞爾と成る。．．．．．母親の使ふ劈刀の
鈴がコロ／＼と鳴つて廻る。

．．．．．と同じ譯で、忽ち六道、俄に天上、鷲
の翼の暴風と成り、鳩の聲の日和と成る．．．．．
いづれも蟲の所爲と聞く、――但、年長けた邪さ
に、蛇を提げた白呈皓研の年増、碁石を含んだ綾羅
金繡の少女を、幻に視たのに相違あるまい。

「確かに然うだ。．．．．．」

あまね 遍く人體に宿る、
げんき 幻奇、
くわいげん 怪玄、
ごう 五臟の神に感謝せよ。

えり 襟を合すと、
しゆけいけん 一種敬虔なる心持で、
あらた 更めて清めた
て 手を拭く、
すあしや 水車仕掛の
てぬくひ 手拭が、
ひ 曳くと颯と下つて、
まきあが kiri / \ と巻上るのが
かまくび 鎌首に似たのに
こころな 故らに一揖して、
たちなほ 立直ると
しんきさわや 心氣爽かに、
ねみだ 寝亂れ姿も、
しやんと成
つて、
しづか 静に
えん 縁を
ひらき 扉に入ると、
はちうゑい 鉢相の
こうばい 紅梅の、
いろ 色も
か 香も
あたひ 新しく
さきい 咲出でたやうに
なが 視めつゝ、
はしこだん 階子段を、
おちつ 落着いて、
あしおと 跽音も
かる 軽く、
う 浮いて
あが 上るやうに、
いづせん 友染に霞の
たちまよ 立迷ふ、
あしゑ 蘆繪とおなじ
かへ 閨に歸つた。

み 見ると・・・
えん 艶に
なまめ 媚かしい、
こたつ 炬燵に
もつ 纏るゝ
もえ 萌黄の
いと 絲、
かいまき 搔卷の
とぢいと 綴絲の
ほろ / \ と
ゆる 緩んで
と 溶けるやう
な、
よ 夜を
こ 籠めて
も 萌ゆる
したくみ 下草の
にほひ 香とゝ
もに、
おもて 戸外に
さつ 颯と松の
みどり 翠の
はる 春の
あめ 雨。

あしゑ 蘆繪の
むね 胸は
な 尚ほ
あらは 露呈に、
かすみ 霞を
つ 掛けて
む 蒸した
ふぜい 風情の、
そで 袖の
みだ 亂れた
て 手の
しろ 白さ。

腰こしを附つけると、褥しとねは浮ういて、天井てんじやうは矢張やつぱり暗くらいが、白しろい雲くもに乗のつた心地こゝちなり也。

然しかも添そひ寝ねの半面はんめんは、暖あたかな池いけに浮うんだ趣おもむきがある。

最もう、恚かう成なると、鼻はなが可愛かはいい嘴くちばしで、髪かみを結ゆつた、鴛鴦をしどりでも構かまはない、畝うねつた二ふたの腕うでが、鵠こうの鳥とりの長ながい首くびで、くるりと巻まいて一つ畝うねつた小蛇こへびを銜くはへて居ゐよ
うが怪けしうはない。

觸さはると、むく／＼と血ちが動うごいて、颯さつと羽は二重ふたへごし漉しに、我わが脈みやくに灌そぎさうな腕かひなを密そつと取とつて、
方きの搔卷かいまきの裡なかに入いれた。
・ ・ ・ ・ ・ 先さ

「かぜを、おひきでないよ。」

と、うつかり言いふと、

「はアイ。」

と現うつらしく、魂たましひに驚うくひすが入交いれかはつたかと思おもふ聲こゑで、幽かすかな返事へんじをしたのが、不ふ思議しぎに、前ぜん世せの約やく束そくの戀人こひととのやうに聞きこえた。

ほろりとするまで、何なんとなく身みに染しみて、熟ぢつと聲こゑを聞きくうちに、いつの間まにか、媚なまめかしい長襦ながじゆばん袷あはが、

蝶の飛模様の小袖に替ると、莞爾笑つた顔と顔を見合せながら。――此の丑満を何處へ行く。

頬被をしなればかり、骨のない袖と袖を、縫れつ、雨戸開ければ欄干越、緋の扱帯の結んだのも松ケ枝に残さずに、濃い浅い翠の梢をスツと渡つて、庭越しに京の町へ出た。

律義な事には、雨がしと／＼と降つて居るので、傘をさす、相合傘、が、番傘で。これが圓くほんのりと暗夜に浮いて行くのが、誰が見るのやら判然見える。見えつゝ、ふは／＼と中有を通る。

蘆繪は草履で。

何處で借りたか、木菟は足駄穿。

處で、傘の柄を兩方の手で持添へながら、

「取替へよう。」

「可いんですよ。」

あれ、・・・何處の國の言葉だか、二人で喋舌つて、足と足と、白々と、ちらりと暗に、穿物を取かへる。・・・踵も空で、矢張り中有だが、

場所が、と思ふと、嘗て詣で、見覚えのある、清水の坂の中途である。

此が魔所だと聞く兒ヶ淵だと、眞葛ヶ原を紀の路へかゝつて、行方も知れず成るのである。

繰るものは鬼にせよ、魔にせよ、行く處は清水と思ふうちに、暗夜には碧い山門の下で、番傘がツと消えると。

. . . . 渠は其の跡を知らなかつた。

ほの明りに緑を籠めた、薄紫の春雨に、障子さへ細目に聞けて、霞の流るゝ庭の樹立の梢に對し、立つと人たけばかりの黒檀の縁の姿見に片膝立てゝ、朱鷺色に白で獨鈷の博多の伊達巻、ずるりと弱腰、鳩尾を縊らし、長襦袢のまゝで、朝湯のあとの薄化粧を、いま仕澄ましてト肱を撓に脇明を雪のやうに覗かせながら、油のやうな濡髪を、兩手に紅を翻して撫付けながら、

「ほゝゝ、貴方の方が色が白い。」

「御串戯もんだ、鬼が笑ひます。」

と、うつかり背後に立つた木菟は、ついと八疊へ疊を、辻つた。

羽二重の座蒲團、脇息を對に、最う火桶には銀瓶
に湯が拂る。……座敷は替つた。二階が三間
續きの間が、然うして蘆繪の容る姿見の在る處
で、向うの六疊が昨夜の閨の、隅の開いた襖の陰か
ら、夜の調度が、散つて崩れた牡丹の花片の如く、
朝の雨を、ほのかに覗く。

さて、さすがに、二條の蛇と、婦の浸つた湯殿へ
は入り得なかつたけれど、傍の洗面場に、……
行届いた、齒磨のコールゲート、石蝕のペイヤの球
を使つて、口嗽ぎ、顔を洗つた心持は、清く爽かで、
胸に滞つたものは何も無い。

且は其夕こそ、待ちに待構へた征矢が、土佐から
歸る日なのである。

京阪地に、切込鍋、また、すいしや鍋、すいしよ鍋とも稱ふるのがある。鯛、鰯の切身と一所に、湯葉、生麸、水菜、菠薐草、蕪の類を交せて薄いつゆで煮込むので、魚は佳し、野菜は甘し、つゆの加減も至極好い、魚と菜を切込むから、一つの名は分つたが、最う一つの方が明かでない、粹な座敷の寸法で、粹者鍋だと言ふのもある、が覺束ない。取合せた魚の頭の、鳴門鯛の眼を水晶に見立て、水晶鍋の所説も拵へ過ぎたり。案ずるに、水煮の意味で、水煮鍋なら大した相違は無ささうである。

此を煮ながら、小雨を見つゝ、掃清めた新座敷で、蘆繪の酌で、白鶴の熱燗となると、昨夜の怪異は、京の地圖に色糸で刺繍した夢に過ぎない。

木菟は半ば忘れて居た。

「あ。」蘆繪が思出したやうに、欄干越に庭を視て、

「池の前の、あ、お亭だんな。」

老梅の枝さしかはす、色の分けて濃き中に、石を

疊んだ苔青う、萱屋づくりの庵を据ゑた。が、小窓の障子雨に深く里を離れた風情であつた。

「四疊半か知ら、洒落たものだね。」

「昨夜、障子の棧に碁石を置きました時、見てか
らな、餘り好うて、夢にまで見たんだす。」

「・・・・・・」

「今朝起きて、先刻お湯に入る前に、一寸飛石づ
たひに、・・・・濡れても構はんわ、・・・・」

と、しなやかに肩に手を遣つて、

「いゝ工合な雨ですよつて、羽織を引かけたなり
で、行つて見ました・・・・壇がおます・・・・」

・男はんと二人こんな離座敷やつたら、眞個に浮
世に思置くことはない、と思つて、横側の障子の硝
子から密と覗いて見ましてん、お客を泊めるか何う
や知れん。こんな綺麗な家ですけどな、疊の上に積
るほど、強い埃だんね三疊敷や、見たよりは小さう
おます・・・・そして何様か祭つてありますわ。
床の間の前に、古いノ、碁盤を飾つて、碁笥の上に、
燈明土器を對に置いて、燈心が二筋ぼんやりと點い
て居ました。」

木菟は杯をパタと置いて、

「はあ、で、祭つたのは。」

「何神様や知れませんが、床の間に眞黒な掛抽が
おましたけれど、暗うて可う分りませんでした、寂々
として、陰氣でな、何やら凄う成つたよつて、密と
歸りましたえ。」

と一寸顔も陰氣に成る。

「へい、大きにお構ひもしまへんで。……」

女中が、銚子のおかはりを持つて來たので。

「やあ、お世話。……姐さん、眞個に閑靜
で、好い心持のお家だね。」

「へい、大きに、……」

「庭の奥の、あの亭のやうな離座敷は、繪にも描
けないやうな形だ、が、何うだらう、……私
がもし生れかはつたら、蘆繪と二人で、彼處へ泊め
て貰へるだらうか。」

「ぢやら／＼と、貴方はん、何言はるゝ。」

と女中が笑ふと、蘆繪も流眇で莞爾した。

「いや、串戯ではない。」

「ほんなら、今からでもお越しやす。」

「しかし、滅多に誰も人を入れないのぢやあないのかね、何か、祭つてあると言ふぢやないか。」

「はあ、巳様が祭つておます。」

「みい様とは？・・・」

「巳様。」

「蛇かい。」

と突抜けけると、蘆繪が密と疊を叩いて言葉を押へて、注意しながら、

「然う、巳様がお祭りしてあるのだつか。」

「家のぬしはんやさうにおしてな。二匹や。」

「えゝ！」

木菟は翼を縮めた。

「出ますか、時々、其處等へ。」

「そないな事、おまへん。」

と女中は頭を掉つて、

「尤な、先のうちは、よう庭へ遊びに出やはつて、松の樹へ絡まうて上らはつたり、軒から、よれ／＼に成つて、二條で下らはつたりしたさうにおす。そやかて、ぬしはんやよつて、どないにもしやはらん。些とも可恐しないさうにおすが。．．．．五七年あとに、嵯峨の法印はんに、内で頼みやしてな。其の法印はんが、あのお亭へ祭つて、封じ込みやはつてからは、最う、お姿は人目に掛けなはらんさうにおしてな、へい、私か奉公して四五年にも成りますけど、眞夏や言うても一度かて拝んだ事はおへん。」

「成程、祭込んだと言ふ譯なんだ。」

「へい、客商賣やよつて、お客様によつては、お姿を嫌はります方もおすやろえ。」

「お客様によらいでも、蛇．．．．蛇も怪けた方ぢやあ尚ほ大變だ。」

「貴方、巳様が化けやはるもんどすかいな、そり

や狐、狸の方でおますぜ。」

「何、狐や狸やら。」

「ほんなら狸を出しまひよか。」

と急に陽気に吻々々と笑ふ。

「狸は嬉しい、呼ぶと出るかい。」

「貴方もな、話ですが。……緋鯉のやうに手を拍いて顔出すのやおへんけれどな、彼處の高臺寺の森には居ますよつて……。つい近間までは、よう見たものがおすさうな。内のお上さんやて、十・一二の頃までは、廣い境内に、娘はんたち遊んでやると、夕景にはな、フイ／＼と、手・手の髪の花替がなく成るさうにおす。あ、あ、言うて手を遣る間に消えまんが。……。あくる朝行つて見た事なら、大きな／＼杉の根のまはりに、何本も、何本も、すく／＼植ゑたやうに並べてあるのえ。」

「此あ手綺麗だね。」

「然うか思ふと、お池がおすがな、此の春のとり／＼とした日中なんで、摘草やかし／＼てやとな、お池のまはりへ、スツ／＼と、誰も人影もおへんに、赤い日傘が、ばあと開いて、七ツも八ツもくる／＼

と並びまつさ、あれ／＼言うて、少女はんたちが取らうとしやはると、シユツ／＼とゴム風船のやうに縮まつて、消えて了ふえ。皆お狸はんの悪戯やさうにおす。」

「面白い、お目に掛りたい狸だなあ。」

蘆繪が、

「眞個になあ。」

つい、此の話に、うか／＼と杯を重ねて、とろ／＼と成るまで酔つた。

「此處のお上さんが、十一二くらゐな時分

と、．．．．．すると、今はお幾才くらゐだね。」

「は、當て／＼お見やす。」

「狸ぢやあないよ。．．．．．一度も逢つた事のない人の年が分るもんですか。」

と言掛けて、何故か、昨夜の湯上りの婦の後姿を思出した。

「が、お待ち、御病氣ださうだけれど、萬端行届いた、此の綺麗事の容子ぢやあ、．．．．．然う二十七八の美人だね。」

「そんなお口のうまい方、養子にしたいさうにお
す。・・・」

「後で知れた。・・・（もし其が事實だ
と、幻怪深刻なる魔媚の修法に因つて、みづ／＼と
少い。）

「が、最う五十才の上だと言ふ。――

蛇も、狸も何の其の、神將の第一人、征矢は、土
佐の沖を雲で飛んで、晩には大阪へ着くと、曾根崎
の石百で落合ふ手筈に成つて居る。
汽車は五時頃ので、京を發てば可い。

蛇の話を紛らすためか、何か、其とも偶然だつた
か、杉の根の花簪と、池の陽炎の繪日傘は、狸の聲
も京訛、太く木菟を喜ばせた。

朝酒の過ぎた酔も頻に、昨夜の疲勞、寢不足で、
小雨は降る、暖し、鶯は鳴く、霞は煙る。

「返おやすみやす、――」

蘆繪に、

「貴方はんも。」

と、女中の言半にして、脇息をづいと、押遣ると、
座蒲團で肱枕。

松の梢の高堀越、寺詣の、わや／＼と人聲
を、

「それ、狸が、狸が。」

「あゝ、ぐつすり寝た。」

と、衝と健かに半身を起す、と起きた方向で、丁ど眞直に中の室の――姿見を飾つた――
其處を通して、昨夜の闇を見るやうに成つて居た
が。・・・

間のやゝ隔つた所爲か、しと／＼降暮らす雨ゆゑか、其處は最う薄暗かつた。其の肘掛窓の處に、黒髪と白い顔、欄干に迫る松のみどりに蒼ずんだ衣きた婦が、寂しさうに一人、熟と此方を見つゝ坐つて居るのを、枕を擡げ状に、蘆繪と見た。

唯、其の婦が、蒼白い横顔で見越して、此方の起上つたのを心付いたらしく、美しく通つた鼻筋のあたりへ、白い手を上げて、黒髪の濃い影から、恚う隠顯と招く。

「おゝ。」

と言言つて、搔卷を抜けた。木菟は、今朝既に衣ものを着替へて、紺博多の角帯を締めたまゝで寝て居たのであつた。が、彼方此方、二三枚、障子を開

放して居たのが、寝ぬくもりを急に引攪つて、肌寒
いので、直ぐ手の行く處に、袖だゝみにしてあつた。
緋の羽織を引被けながら、ずつと中の室まで出た。
が、蔽のしてない、其の姿見に、明かに我が等身の
影が、疊を斜違に足袋ながらスツと映つたのに、ふ
と瞬く間氣を取られた。

取られたうちに、つい、其處に、つい、その手招
きした人の姿が影も無い。

隠れたか、と覗いた、が附したが、押入も何もな
い、振返つて、小戻りをして、恚う立状に覗くと、

「何だ。」

蘆繪は、我が其の搔卷と枕を並べて、おなじやう
に寝て居たのである、べたりと濡れたやうな鬢が、
あの横顔を柔かに劃つて、桃色の小枕の布が、ほん
のりと脛に映つて、濃い睫毛まで見える。

あの、こんもりとした鼻どころか、其睫毛さへ頬
に觸れたらう、と思ふと、
へた。

其れを厭つたのでは斷じてない。

渠は、生れて以来、其の蘆繪の寢姿ばかり、艶々しいとも、もの凄いと、不氣味とも、可恐いとも、綺麗だとも、濡れたとも、光澤つたとも思ふのを見た事がなかつたのである。

と言ふのは、齊しく薄寒かつたか、袖も肩も、やがて顔の半ばまで、ひた／＼と身につけて、するりと横寝の、脊筋をなぞへに、ふつくりと腰の線を搔卷いて、すつと爪尖を揃へた、裾は細く、隣の搔卷に隠れたが、蘆繪が身を包んだのは羽蒲團で、萌黄と、薄萌黄が光線の工合と姿で濃く淡く、更紗形の羽二重に、黄、樺色、朱、青を交ぜた唐草をちら／＼彩つたが、伏糸で、する／＼と横に綴目をつけたのが、畝つて、波を打つて、縫れて、恚う巻きに巻いて、すべ／＼として滑かな、・・・で、何と見えよう、萌黄、薄萌黄の縞の膚に、黄と朱と、青い鱗を鏤めた、錦に紛ふ蛇一條。

鼻白く、睫毛濃く、髪黒く、松の疊に満ちて脂に薫る裡に、降る雨に、しんと、寢鎮まつて居るのである。

木菟は立窘んだ。

「いや、しかし構はない、……あの婦を我がものに、……此間から言ひ難い迷にも、大阪の妓だ。……男振は構ふまい、金がなくツて、何うして煩惱の犬に従はし得よう、と謹んだ。此の紫首錦體の毒蛇を征服する望はない。が、吞まれて、餌と成つて溶ける事は出来るだらう。……溶けよう、蕩けよう、あの青く畝つた腹へ、……」

ぶる／＼と成つて覗込んだ。トタンに姿見に映る顔を見れば、あゝ、親の産んだ面影は、木菟には似ても、蛇ではない。

「えゝ！ 氣を確に。……」

思はず、二の腕を擦ると、……こゝに植ゑた種痘のあとは、鱗でない。

清い、幼い、熱い涙一が、ほろ／＼と流れて、衝と身を、六疊の間へ退いた、連子づくりの小欄干。

「誰ぞ、……此處で今招いた婦は？」

……

瞳を、庭の面に外した渠は、又愕然として駭いた。
こゝにも不思議なものを視た。

樹がくれの、亭の、障子の、硝子越に眞青な婦の
姿が映る。・・・いや濃い群青、緑青の色、青
銅の徴の色だと言はう、古樹の幹の黒ずんだ苔にも
似て居る。・・・

肩、襟、胸、帯の上あたりまで、端坐して、半身
が梅松の葉を分けて、硝子に映るのが、青とも、緑
とも、縹色とも譬へむ方なく、袖、衣紋の、隈あり
と思ふ處は、緑青で刻んで、左向きに、斜な、差俯
向いた、瘦せた横顔は藍よりも青く、島田鬘にや、
と思ふ髪は、群青を濃く束ねて、淡くはら／＼と淺
黄のおくれを亂したのが、色ある影繪の如く、薄く
煙る雨の奥、碧潭の如き庭の緑の底に、後なる山の
森の蔭を籠めて、鮮明に見透いたのである。

何秒か何分か、はたそれ、幾干の時ぞ、瞬きもし
ないで膽つた間、婦の影は、毛一條揺ぐともせぬ。

はつと瞳を離す時、黄昏の京の電燈は、ニと濡色に散つて點れて、影を中空に流しつゝ、庭の松にもちら／＼と青く點れた。

座敷の障子は、颯と紫。

青い婦の、亭の窓は、其よりも濃い、暗いばかりの紫である。

「うゝむ。」

と幽に坤吟くかとするれば、蘆繪は、衝と枕を上げて、藍を散らし朱を鏤めた、其の滑かな、羽蒲團のまゝ、顔を上げて此方を見越す。．．．

木菟は手招きした。

「了つた．．．」

噫、此の舉動は、怪い婦が、今しがた我を招いたのに肖た、と胸を打つたが、最う遅矣。

「おゝ寒い。」

とゾクリとしたやうに、色は薄白みつゝ、羽蒲團を其のまゝ取つて、肩を引しめながら、夢に乗つたやうに、飛模様の蝶々の裳、ふら／＼と此方に來

つゝ、

「貴方。」

と、崩れるやうに、くったりと寄添ふ。

「蘆繪さん。」

「え。」

「一寸、彼處を……」

「あれ、」

と——一聲、すつくと立つた。が、亭の窓を

視るや、否や、

「あ！ 彼處に私が居る。」

と言ふかと思ふと、何の間もない。高く欄干を跨

いで出た、裾は離れた、堪るべきや。髪は倒に、枝

にも留まらず、中有に落ちる、刹那、殆ど無意識に、

木菟は、飛去る雲を掴むが如く、両手で羽蒲團の片

裾を絞つて留めた、が欄干に、ズンと女の身の重量

が響く。

蘆繪は生死の力を籠めた拳で、縊るゝばかり肩を

包んだ羽蒲團の其の片端を、襟許に引締めながら、

二間下なる車輪の如き飛石を空に離れて、眞倒にず

るりと下つた。

ぶる／＼とわな／＼く、畝る、波打つ、と腕はしび
れ、手は萎える。・・・救を呼ぶに聲は出ぬ、
目は明かに、松葉の數さへ一枚々々を算るのであ
る。軒には霞もあるものを、松葉よ、裯を縫留め
よ。・・・面影は蜘蛛の巣に搦まれて、綾を抜
けた蓑蟲で、姿は苦む錦の蛇。

悶え、苦み、巻上り、巻下り、畝々と、伸びつ、
縮みつ、果はくる／＼と腹を翻して、青い鱗に乳も
あらはに、朱の鱗に脛も亂れつ／＼と思ふと、最後
の顔に、莞爾と微笑んだが、肉身の膏は赤く衣に染
んで鱗を通すと、木菟の身からも瀧の如く、氷か
と思ふ汗が流れた。

力は堪へず、目が眩んで、うむと言ふと、男が欄
干を上へ、ずる／＼と引かれて、蘆繪の髪は、血の
火花をバツと飛石に散らして、水に捌くが如くに地
に亂れた。――亭の燈明がちらりと光る。

途端に我に返つた。が、ハツとはじめて夢の覺め
た、睫毛に近い蘆繪の顔は、思ひなしか、おくれ毛
も濡る／＼ばかり汗ばんで然も蒼白い。

小枕の桃色の布を見るさへ、滴る血汐、瞳を破る。
・ ・ ・ ・ ・ 木菟は慌しく衝と立つと、次の室の姿
見に、先づ我が生きたる面を映して、密と六疊へ出
て、窓を欄干から覗くと、あの、亭の障子に、同じ
婦が、同じ色が、同じ姿が。
雨を黄昏の電燈が松の梢に流れた。

心を鎮めて、羽織の紐を確と締めると、木菟は、
一人で密と二階を下りて、縁側へ出會がしらの、女
中に、

「一寸、」

とだけ言つて、玉芝を戸外へ逃れて出た。・・・
・同じ室で、同じ事して、蘆繪を起して、同じ事
を繰返さねばならない事を信じて、恐れ且つ危んだ
からである。

松原の茶店へ休んで、其處で自動車を逃へて、其
から結玉章で蘆繪を呼んだ。――勘定寓事宜しき
やう。・・・委細は途すがら、との趣にて。

―― 扨て自動車で、無事な顔を見合せた時、
「何ですか、不思議な。」

蘆繪が先づ言つたのは此である。

「私、可厭な夢を見ました。・・・朝靨いて

来た、あのお亭へ、行きたうて、又行きいました。
祇園の舞妓はんが二人、・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「藝妓はんも居た。皆が車座に成つて、碁石につけては油を舐める、・・・・・・・・碁笥の中は、油どしたえ。・・・・・・・・床の間の掛軸に向うて、をがんで居たのが奈良で碁を打つた御寮人はんどす。じろりと私を見て、いゝ色艶や、艶豊して言うて、裸體にしゃはるとな、ー蛇が二筋、・・・・・・・・私の手足を巻いて締ると、血も肉もたら／＼と滴に成つて、碁笥の中へ、・・・・・・・・あツ！」

と言ふ。・・・・・・・・時しも自動車は、一方が鼠色の築地で、一方青い練堀の長く續く、渺とした人なき黄昏の廣い道路を走つて居たが、途端に、路傍の柳の下から、ふら／＼と宙を出て横状に突切つた、藍よりも青い、先刻の女が、と思ふと、ギシツと瘻響るが如く車が留まつた。

「殺つた。」

と附添の助手が、翻然と鞠のもんどりを打つやうにはずんで下りる。

「あ、人を轢いた。」

蘆繪は弱々と成つた、白い頬を、ぐつたりと水菟

の膝に落した。

「何うした。」

「大丈夫・・・何だ、何にも居らん。」

這繼つて車輪の前後を覗いた助手が、すくと立直つて、しゃんと乗ると、桑の平内の如く、しゃち硬張つて石に成つた運轉手が、ぐい、と把手に指を掛けるや、三間ばかり、ツツと乗戻して、凱旋將軍の圓陣に揖する如く、這個大道を輪に、迂らし、半輪に舞つて一廻り廻るかとするれば、静な勾配の廣々とした坂に掛つて、疾風の如く躍つて行く。

嬉しさと、可哀さと、もの優しさと、心細さに、雪の頸を抱上げると、弱々と成つた蘆繪の頬に、ツト唇を當てた、が冷かつた。

自動車は停車場より先に、最寄の醫師の玄關へ着けねば成らなかつた。

征矢も、大阪から京へ來なければ成らなかつた。来た。が、其の力も病める婦を如何にせむ。

蘆繪は一度、大阪へ歸り得るまで、持直したけれども、又やがて中の島の病院で情ない姿で果敢く成

つた。

木菟も久しく煩つた。

不思議な事には、今まで身の毛を悚立てた蛇が、
その、何となく、よくて成らぬ。動物園を覗く、花
屋敷に立つ、其の大きく、のたうつほど、尚ほづら
／＼巻かれたさに堪へられないのを、浅間しがつ
て・・・

―― 内證で話した ――

渠には言いふまい。作者だけ、密に祇園の或人が
ら聞いたのには、京なる、藝妓、舞妓には限らない、
内儀娘たちの或秘密な組は、(場所は言はなかつた
が、) 蛇神を信ずる。色のます／＼艶に、媚の愈々、
淫ならむことを欲するのである。あの、油を嘗める
と、瘦せたるも白く滑かに、枯れたるも黄に濕ふと
聞く。黒石で齒を磨いた舞妓は、襟かへの金主を求
めたので、白石で研いだのは、旦那を取替へるのだ
さうである。蟲の術者は凄いやうな婦で。毎月生駒
の聖天に參籠する。・・・ 碁石は、お百度の行

の数取かずとりに用もちゐるので、蛇へびの鱗うろこを形かたど象とるが、怪あやしく可おそ恐ろしき靈れい驗げんを示しめす。さて、其その油あぶらは、色いろよく、顔かほよく、肉にくよき女をんなを種さま々々の術てだてを以もつて呪のろつて絞しぼる。．．．
．．．かくて生命いのちの絶たゆるものありとか。奈良ならの旅籠はたご屋やの主ぬしなき幾多いくたの影膳かげぜんは、其それがための供養くやうであつた。――老おいたりと言いふに、アノ艶婦えんぶ。．．．
――瀨瀨城かうけつじやうの一種いっしゆであらう。

【完】